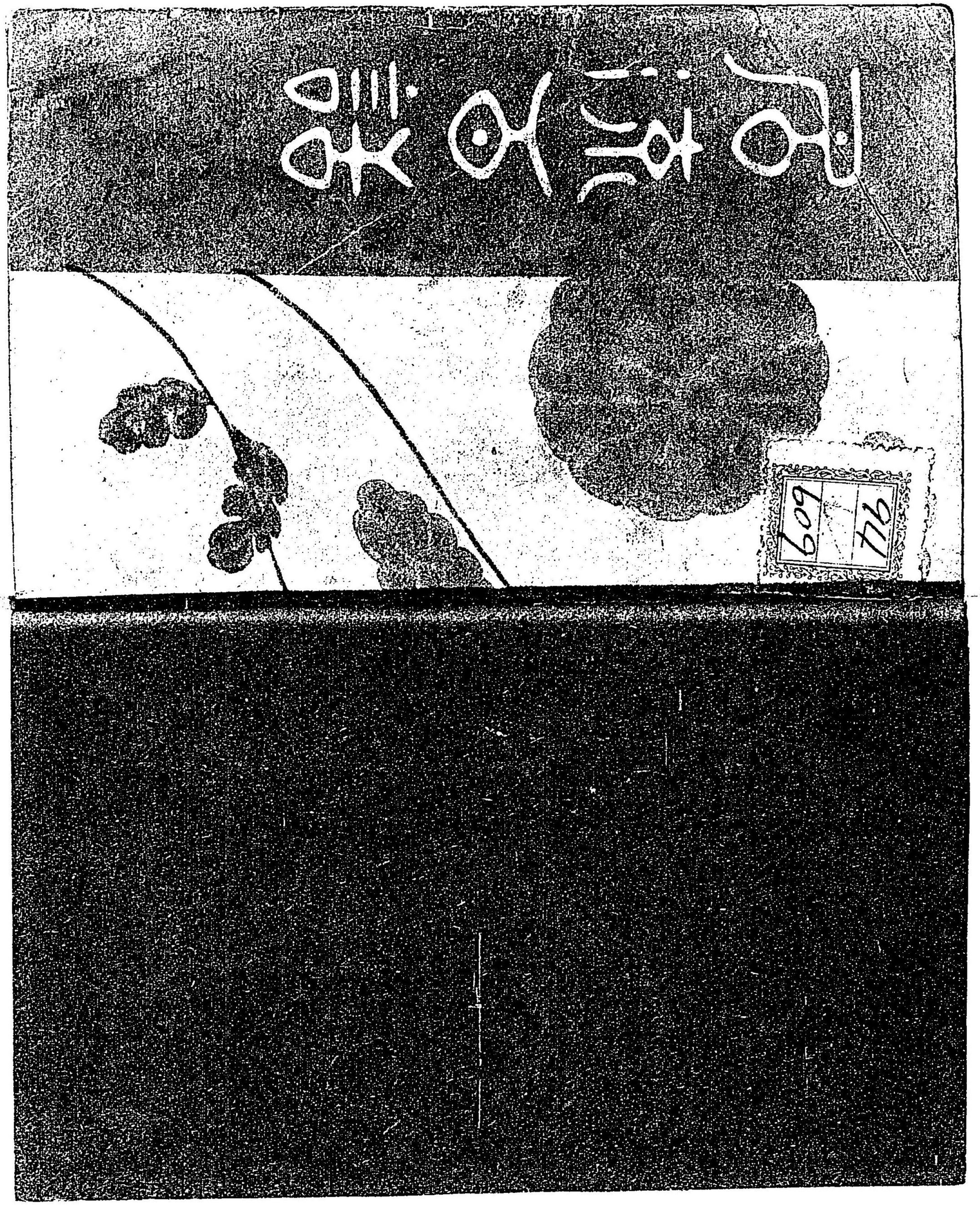
609
776

94-609

名流百話

明治
42 2 15
内交

名流百話目次

○德宮蘇峯九九を解せず……一
○根本通明愛劔を書生に與ふ……二
○和田垣博士御酉樣の講義をなす……二
○同博士ブライアンと金貨本位を論ず……二
○西郷隆盛二妾を蓄ふ……四
○威仁親王殿下單人の番兵とならせ給ふ……五
○戟仁親王殿下自炊せらる……六
○大山元帥眼中鹿兒島なし……六
○江見水蔭美術學校の試驗に落第す……七
○坪内逍遙大に辟易す……八
○犬養木堂洋服に高下駄を穿つ……八
○雨宮敬次郎藥屋と間違へらる……九

○淺野總一郎火吹竹にて立身す……九
○岸田吟香釋迦の故智を學ぶ……一〇
○末廣鐵腸鷄卵を碎きて墨に代ふ……一〇
○內村鑑三校長の演說を冷評す……一一
○齋藤修一郎いろは文庫を英譯す……一二
○島地默雷の諧謔……一三
○久保田米僊外人に矢立の註文を受く……一三
○福本日南の夫人碁盤を兩斷す……一四
○德富蘆花野人と問逆へらろ……一五
○勝海舟古本屋の店頭に學問をなす……一六
○勝海舟役所を以て辨當を喰ふ場所となす……一六
○古河市兵衛チョン髷に依て成功す……一七
○本多靜六大食して下婢に謝す……一七
○五姓田芳柳五家を潰す……一八
○李鴻章大久保利通の度胸に驚く……一九

○內村鑑三水產を拋つ……一九
○黑田長成內職を本ものになす……二〇
○正直正太夫の著書書肆の主人を怒らす……二一
○伊藤圭介元氣益々盛んなり……二一
○西鄕從道其師を擊つ……二二
○西鄕從道諸元老を驚かす……二三
○西鄕從道文部省に居睡す……二四
○今村清之助友情に厚し……二四
○淺田宗伯束帶して宿直す……二五
○沼間守一要君を取違ふ……二五
○立見將軍敵前に眠る……二六
○島田蕃根再び人間を望む……二七
○中井弘大久保甲東を馭者となす……二七
○中井弘岩倉對大久保の碁盤を轉覆す……二八
○中井弘木戸孝允を歎く……二九

○中井弘三十圓の花瓶を三千五百圓に賣る……三〇
○中井弘井上芳川の二人に饗せず……三〇
○廣津柳浪雅號の爲に退社す……三一
○幸田露伴周易を能くす……三二
○波邊國武一家を治むる力なし……三三
○新聞は營業でない……三三
○尾崎紅葉田山花袋とサブライムを論ず……三四
○安田善次郎石盤を以て手帳に代ふ……三五
○副島種臣李鴻章の毒氣を抜く……三五
○大久保甲東の果斷……三六
○益田英作は盜賊で御座らぬ……三七
○乃木大將好んでぼろ車に乘る……三八
○木戸毛布を以て黑田を裹む……三八
○山縣有朋名妓と接吻す……三九
○星亨官の字を忌む……四〇

○松本重太郎信用せられず……四一
○若尾逸平圍碁に醉ふ……四二
○角田眞平妻君を華族の令孃と間違ふ……四二
○福羽美靜門前に制札を建つ……四三
○木戸孝允既に音曲師たらんとす……四四
○江原素六の眼に映じたる吉原……四四
○外山正一外人に縛せらる……四五
○都筑馨六藝者を恐る……四六
○後藤象次郎お芋を託せらる……四六
○後藤新平臺灣移住者を以て石鹼玉に比す……四七
○雨宮敬次郎類燒を喜ぶ……四八
○田口卯吉貧兒を泣かしむ……四九
○圓朝燒芋を食ふて天下に名を出す……五〇
○三味線六差配を恐れしむ……五〇
○常陸山米國人の膽を抜く……五一

○河野廣中腕押に勝ちて相撲で負傷す……五二
○副島伯代議士を冷笑す……五三
○後藤牧太淑女をして自失せしむ……五三
○伊藤博文碁の助太刀を頼む……五四
○尸水博士周易に通ず……五五
○鈴木藤三郎能く人材を登用す……五六
○齋藤實後藤新平に酷めらる……五六
○田子理學士坊主に怒らる……五七
○品川彌二郎菓子の餡み食ひ……五八
○西郷隆盛家僕に謝す……五八
○石黒忠悳蕎麥湯に飢を醫す……五九
○守田寶丹恩人に邂逅す……六〇
○德富蘇峰同一の書狀三本を認む……六一
○山座局長狂亂は仕らぬ……六二
○田口卯吉一の餘財なし……六二

○井上角五郎醫者の資格なし……六三
○井上角五郎福澤翁に見込まる……六三
○桂舟死を宣告せらる……六四
○弘田博士三井家の招聘に應ぜず……六五
○福地源一郎頑固黨に言論の自由を說く……六六
○鳩山和夫の演說米櫃に響く……六七
○今村清之助アイスクリームに震へ揚る……六八
○鳥尾得庵槍を担山に擬す……六八
○阿部吾市人の寢息を窺ふ……六九
○武內桂舟大食人を驚かす……六九
○中井弘斎筮を以て妻を娶る……七〇
○末松謙澄裸體にて人に接す……七一
○添田壽一國旗を小學生徒に敬へらる……七一
○細川護久能く前約を守る……七二
○成島柳北石井南橋と遊ぶ……七三

○原坦山佛教に負けて坊主となる……七四
○金子堅太郎貴族となる……七四
○小野梓圃に書架を設く……七五
○福澤翁一升桝を傾く……七五
○岩倉具定駝婦になぐらる……七六
○細川潤次郎新聞の効能を說く……七七
○井上角五郎且つ喜び且つ恨む……七八
○板垣伯人に接する百舌鳥に及ばず……七九
○望月小太郎慳貪を挫かる……七九
○高島平三郎老母を背負ふ……八〇
○小川鮒吉部下を愛撫す……八〇
○江木衷駕籠夫の腕に嚙みつく……八一
○江木衷退級を請願す……八二
○雲右衛門木戸錢の高きを以て廣告に代ふ……八三
○平沼專藏慾の皮益々突張る……八四

○岸田吟香號銀公より轉化す……八四
○中村不折巴里博物館に立往生す……八五
○中村不折汽車を停む……八六
○武内桂舟筍の頭を刎ぬ……八六
○烏尾將軍遺子を三浦中將に託す……八七
○香月恕經痘痕に依て名あり……八八
○增島六一郎石井常右衛門を氣取る……八九
○陸奥宗光李鴻章を驚かす……九〇
○米田侍從樯公よりも忠なり……九一
○福澤諭吉紳士を以て乞食に比す……九一
○乃木大將の武士道……九二
○武富時敏死を恐れず……九三
○福島將軍めざまし時計となる……九三
○中江兆民臨終雲照律師に灰拂を擲つ……九四
○大江卓崩して高利貸の娘を娶る……九五

○松本順勝海舟を凹ます……九五
○山岡鐵舟自筆の贋物を購ふ……九六
○板垣伯太刀山に相撲の手を教ふ……九六
○杉浦重剛妻を書生に擬す……九七
○古莊嘉門勝邸にかくる……九八
○大隈伯大に氣焔を吐く……九九
○澁澤榮一薩摩壯士の贈を冷す……九九
○渡邊國武倒れて學生を戒む……一〇〇
○渡邊洪基福澤先生の餅を盜む……一〇一
○大久保一翁元老院に居睡す……一〇一
○岩崎彌之助鳥尾得菴の根强きに驚く……一〇二
○三浦梧樓菓子箱で失敗す……一〇三
○雨宮敬次郎安田銀行に拒絕せらる……一〇三
○濱政弘車夫の資格なし……一〇四
○矢野次郎老朽官吏を罵倒す……一〇六

○丸山作樂位牌を毀ちて風呂を沸す……一〇七
○神田孝平脫刀令を動かす……一〇七
○野津道貫鞭を啜つて學校に通ふ……一〇八
○栗本鋤雲アイヌの言に服す……一〇九
○中江兆民陰盞を以て酒杯に代ふ……一〇九
○大隈伯老いて益々盛んなり……一一〇
○福澤諭吉鐵砲に代ふるに洋書を以てす……一一一
○井上馨壯士を欺く……一一一
○岩崎彌之助六錢を纏頭とす……一一二
○古河市兵衛元金二百兩に對し毎年利子二百兩を拂ふ……一一三
○古河市兵衛用語極めて鄭重……一一四
○川端玉章吉野樣績をやり込む……一一四
○橋本雅邦妻君より覗かる……一一五
○橋本雅邦岩崎に負けす……一一六
○村井吉兵衛夢に依て煙草の名稱を附す……一一六

○石川舜臺ホッと息つく……一一七
○井の角倫敦紳士を驚かす……一一八
○加島屋淺子僧侶を凹ます……一一八
○朝田又七徒步鐵道を踏査す……一一九
○西村勝三義理を堅ふす……一二〇
○馬越恭平ビールの廣告者となる……一二一
○磯逸彌一郎米國人に恥をかく……一二二
○市村博士學習院の生徒となる……一二二
○馬場辰猪饅頭を食つて佳人を聘す……一二三
○大石正巳禪機に通ず……一二三
○福島安正屋根に眠る……一二四
○岩崎彌太郎夜鷹蕎麥の喰逃げをなす……一二四
○岩崎彌太郎算術を獄中に學ぶ……一二五
○大江卓馬丁に馬鹿にせらる……一二六
○井上圓了哲次郎博士を弟となす……一二六

○山本權兵衛算術の新語を製す……一二七
○井上遠也伯林に日本語の演說を爲す……一二七
○島田三郎六歲にして始めて言ふ……一二八
○島田三郎始めて犢鼻褌を占む……一二八
○福地源一郎琵琶を以て人を去らしむ……一二九
○馬場辰猪鼙舞を能くす……一二九
○犬養毅ブランデーを以て學者とす……一三〇
○中江兆民天水桶に浴す……一三一
○朝比奈知泉待合を以て編輯局とす……一三一
○朝比奈知泉の文章は娼妓の起誓文に等し……一三二
○高島嘉右衛門根本翁の爲めに頭をかく……一三三
○伊藤博文新聞記事を罵燒と爲す……一三三
○白根專一家を有せず……一三四
○桂太郎麥酒と煙草を濁酒人に學ぶ……一三四
○曾禰荒助光妙寺三郎を三階より突落す……一三五

○志賀重昂詐欺にあふ……一三六
○陸奥宗光伊藤公を以て大愚物と爲す……一三七
○井上馨替て綿入を着けず……一三七
○福田行誠師盜賊を追拂ふ……一三八
○福田行誠師吉原に遊ぶ……一三八
○田尻稻次郎交番燒打事件の發頭人と間違へらる……一三九
○高田早苗の帝東學堂を困らす……一四〇
○奥田義人の睾丸演說……一四一
○湯地機關總監伊東元帥の睾丸を握る……一四一
○栗原亮一新聞を蒲團に代ふ……一四二
○清浦奎吾芋を盜む……一四三
○天下の糸平醉客の爲めに大儲けを爲す……一四三

目次終

名流百話

渡邊斬鬼編

○德富蘇峰、九九を解せず

國民新聞主筆德富猪一郎、幼時小學校に在るの時、敎師算術を敎ゆ、九九の二の段に至り、二三が六、二四が八を解する能はず、二と三は五、二と四は六なるが故に、二三が五、二四が六とのみ言ひ張り、如何に敎師が其否らざるを說明するも、却て敎師の誤解たるを主張し、二三が五、二四が六を唱へて止まず校中の大評判となる。

○根本通明、愛劍を書生に與ふ

根本通明翁、最も古物を愛す、刀劍類を處狹き迄居室に並べ立つ、書生あり、日清戰役の際從軍せんとし、翁の夥多刀劍を蓄ふを聞き、馳せて翁を訪ひ、不用の一刀を無心す、翁其書生の熱心に感じ、志津三郎兼氏の名刀一口を與ふ、兼氏の銘刀なるは豫て彼れも之を聞知せるところ、あまりに銘刀に過ぐるの故を以ていささか躊躇す、翁怒氣を帶びて曰く、銘刀にあらざれば其用を爲す可らず、行け！　行け！　行きて其斬味を試みよと、書生倉皇謝辭を述べ、意氣昂然として門外に去る。

○和田垣博士、御酉樣の講義をなす

經濟學者和田垣博士、吉原田甫の御酉樣に參詣し、翌日大學講堂に登り、御酉樣の講義をなす、曰く『抑も御酉樣は大に經濟學に關係を有す、如何となれば御酉樣の熊手は搔込主義を代表するものにして、千兩萬兩を搔込み之を手放さゞれば、我經濟學上に惡影響を及ぼすと少なからざればなり』と、滿堂爲めに哄然たり。

○同博士、ブライアンと金貨本位を論ず

米國ブライアンの我國に遊ぶや、和田垣博士之を訪ふて、談偶ま金銀貨本位論に及ぶ、和田垣博士は金貨本位論者にして、ブライアンは銀貨本位論者なり、甲論乙駁互に口角泡を飛ばし

て、盡くる所を知らず、和田垣博士大喝一聲結論して曰く、サイレンス、イズ、ゴールド（沈默は金なり）と、**ブライアン**啞然として應ふるところを知らず。

○西郷隆盛二妾を蓄ふ

西郷隆盛、陸軍大將となり東京に住す、獨身にして家に女流なし、炊掃皆下僕に委す、同僚皆夫人の上京を促がせども聞かず、一日岩倉、大久保の二公往訪し、談偶ま蓄妾に及ぶ、翁微笑して曰く、『實は疾くにお鶴お松の二妾を蓄ふ、諸君は定めて予が見かけによらぬ通人なるに驚くならん』と、乃ち下僕に命じてお鶴お松を呼ばしむ、且くして下僕最と大なる獵犬二頭を

曳き來り、主人の左右に坐せしむ、翁得々顋を撫で、曰く、『これ予が愛妾なり、いづれ劣らぬ別嬪ならずや。』

○威仁親王殿下、罪人の番兵とならせ給ふ

威仁親王殿下、明治十五年英國に留學せられ、地中海艦隊旗艦**ウ井クトリヤ**號に、金枝玉葉の身を以て、實地練習に餘念あらせられず、一日某將校官遊の序を以て拜謁を求む、艦長曰く『殿下には只今勤務中なれば暫時待たれよ』と、それより將校を案内して艦内を周覽せしむ、やがて最下層なる薄暗き廊下へ歩を進む、惡臭紛々殆んど堪へ難し、艦長指して曰く、『右なるは火藥庫、左は石炭艙なり』と、既にして又曰く『此所は罪

人を繋ぐ所、其戸口に佇立しつゝあるは番兵、其番兵こそ足下が拜謁を請はんとする御方なり』と、其姿勢嚴然として左ながら盤石の如し。

○載仁親王殿下自炊せらる

閑院宮載仁親王殿下、曾て**サンシール**士官學校に在らせらる、**サンシール**士官學校にては、上等兵下士炊事を司る、一日校長殿下を試み參らせんとして、炊事の任に當らしむ、生徒の食事は勿論、荷荷の詰替等をも命じたるに、孰れも他の生徒に優る、校長始め何れも一驚を喫す。

○大山元帥、眼中鹿兒島なし

一日階行社に於て大宴會あり、將校以下集るもの多し、宴酣なるに際し、一青年士官あり、杯を擧げて大山元帥の許に至り曰く『閣下よ自分も鹿兒島の出身なれば今後宜敷く御引立を希ふ』と、元帥便々たる腹を撫して曰く『奇怪の言を聞くもの哉日本の軍人に外國人は居らぬ筈ならずや。』

○江見水蔭、美術學校の試驗に落第す

明治の小説界に其名高き江見水蔭、曾て美術學校の入學試驗を受く、教師其得意の繪畫を描かしむ、水蔭江戸繪風なる團十郎の似顔を描いて之を提出す、教師之を見て哄笑一番、其美術家に適せざる故を以て之を退く、水蔭頭を掻いて竟に美術家の念

慮を絶つ。

○坪内逍遙、大に辟易す

文學博士坪内逍遙、嘗て某地方の講習會に臨む、地方人士は博士を以て萬能の神の如くに心得、或は經濟に、或は政治に、或は法律に、或は化學に、或は算術に、或は習字に質問百出、流石の博士も、大凹みに凹んで、倉皇歸京す。

○犬養木堂、洋服に高下駄を穿つ

政界の曉將犬養木堂、曾て小田縣の收稅屬となり、粗野なる洋服を穿ち、仙骨稜々たる木履を穿つて、寒村孤驛を跋渉し、酒醤油等の檢査をなす、當時洋服に高下駄先生といへば、犬養木

堂たるを知らざるものなし。

○雨宮敬次郎、藥屋と間違へらる

雨敬の鼻糞丸めは有名のものなり、或日二三の友人と青樓に登り、底拔け騷ぎを爲す、雨敬例に依つて頻りに鼻糞を丸め出す、藝妓傍らに在り、揶揄して曰く『旦那の御商賣は藥屋さんですか』と、友人すかさず眞面目臭つて、『オヤお前は此方を知つて居るのか、藥屋仲間の集會席で御知合だね』と、藝妓面喰つて『あらほんとに藥屋さんのですか、道理で手つきの巧いこと！』

○淺野總一郎、火吹竹にて立身す

淺野總一郎、再度養子に行き、二家の身代を潰す、最後の養父

怒つて總一郎を火吹竹にて撲る、前頭腫れて、疼痛頻りに彼れが心魂に徹す、總一郎密かに期す、よしこれより大奮發をなし、いつかは此恨みを晴さんものをと、つひに火吹竹の爲めに今日あるを得たり。

○岸田吟香、釋迦の故智を學ぶ

岸田吟香、曾て佛典を渉獵し、釋迦が全能を說かずして、三不能を唱するに感服す、自ら精錡水を發賣するに當り、此眼藥は、そこひにはきかずと斷る、是即ち釋迦が三不能の故智を學びたるもの。

○末廣鐵腸、鷄卵を碎きて墨に代ふ

末廣鐵腸、新聞社に在り、條例に觸れて獄に下る、慷慨悲憤の詩、胸を突いて湧出するも、筆なく、墨なく之を記するに由なし、日夜工風の末、髯を拔き髮を束ねて筆となし、鷄卵を碎きて墨に代へ、以て日々漢詩數篇を賦す、滿腔の熱血迸り出でて字々皆血、句々皆涙、之を滿期放免の人に託して、密かに新聞社に送る鐵腸は獄に在るも其詩は躍りて社會を驚殺せり。

○内村鑑三校長の演說を冷評す

内村鑑三、第一高等中學校に語學教授たりし時、一日生徒及職員の演說會あり、校長以下諸生の演說終るや、鑑三即ち演壇に登り、悉く演說の批評を試む、而も曾て校長の演說に及ばず、

某生徒之を見て不平に堪へず、大聲絶叫して曰く、先生何ぞ怯懦の甚しきや、生徒を評して獨り校長に及ばざるは、蓋し校長の忌諱を恐るゝものならんと、鑑三聲に應じて曰く、否校長の說く所は演說にあらず、訓示なり、訓示は評するの限りにあらず、若し之をしも演說と言はん乎、一顧の價値なきを奈何せんと滿場一齊一笑す。

○齋藤修一郎、いろは文庫を英譯す

齋藤修一郎、嘗て米國に遊び、ハーバード大學に入る、嬉戲遊樂敢て學ばず、忽ち負債山をなし、進退殆んど谷まる、友人中いろは文庫を携ふる者あり、借り來つて之を英譯す、米國淑女

爭ふて之を購讀し、忽ち意外の利益あり、乃ち負債を返却し、行李を修めて倉皇歸朝す。

○島地默雷の諧謔

明治二十七年六月、人あり島地默雷を京都の假寓に訪ひ、談偶ま衆議院の解散及貴族院の停會に及ぶ、老師句あり。

衆議院(寺に擬す)なら解散(開山)もある道理

去らば、貴族院は如何にと問へば、老師忽ち、『歸俗なら開山はいるものでない。』

○久保田米僊、外人に矢立の注文を受く

畵伯久保田米僊、嘗て米國に赴く、歸途汽車中に小荷物を忘る

畵伯外國語に通せず、矢立を出して、其狀を一紙に描き、之を驛長に訴ふ、驛長其意を諒し、忽ち電話を以て之を取寄せ畵伯に渡す、それより畵伯の名俄かに昂り、車中爭ふて揮毫を乞ふもの多し、乃ち矢立を以て之れに應じ、立ろに數十枚を描く、其健筆を以て矢立の作用に基くものと誤認し、畵伯に向て矢立の注文をなす者多し。

○福本日南の夫人碁盤を兩斷す

福本日南、常に圍碁に耽る、客あり盤面に對するや、親が死んだとさを繰返す連中なり、新聞社より原稿の催促を受くる屢々なるも、相手のある間は一向に頓着せず、殆んど夢中なるを以て日南の夫人之を見兼ね、或日大鉈を携へ來つて、バチ〳〵の眞最中秘藏の碁盤を兩斷す、爾來悟る所あり、つひに圍碁に耽らず。

○德富蘆花、野人と間違へらる

小說『不如歸』の著者德富蘆花、曾て知人綱島梁川の葬式に列す秋雨蕭々、道路泥濘行人を艱ましむ、蘆花の木履低ふして、泥土の飛沫外衣にかゝり、風采あがらず、宛然野翁の如し、壹岐殿坂より靑山墓地に尾するの間、見るもの何れも下賤の野人となし、密かに笑はざるものなし、然も平然、其墓地に達するや直ちに木履を脫ぎ、芝生に其足をなすりつゝ、泥土を去りて後恭

しく追悼の意を表す、是に於て初めて其蘆花たるを知り、尊敬の情を拂ふ者多し。

○勝海舟、古本屋の店頭に學問をなす

勝安房、幼時古本屋の前を過ぎ、偶ま我が讀まんと欲する書物の陳列するに逢ふ、嚢中之を購ふべき貯へなく、毎日店頭に立つて之を讀むこと數旬、書店の主人之を感じ、席を與へ茶を給して之を遇す、乃ち海舟後に志を得て、彼に其報恩をなせり。

○勝海舟、役所を以て辨當を食ふ場所となす

勝海舟、海軍大臣たる時、毎日定時間に出でゝ定時間に歸り、嘗て怠ることなし、然も何等事務に干與せず、凡て下僚に任せて、常に役所を以て辨當を食する場所となす、而も諸員勉强し事務整理す。

○古河市兵衛、チョン髷に依て成功す

古河市兵衛、嘗て說て曰く、凡そ成功せんとするものは、須らく運、鈍、根の三者を守らざる可らず、運は天運にして、鈍は鈍ハイカラならざるの意、根は根氣にして耐忍を意味す、此三者相完きを得ば、如何なる難事業も成功せざる事なし、我がチョン髷も亦蓋し這個の文字中に籠れりと。

○本多靜六、大食して下婢に謝す

林學博士本多靜六、學生時代、同窓者と共に登山せんとして某

祠官の家に投ず、朴訥飾らず、健啖殆んど飯櫃を傾けんとす、下婢其盡きん事を恐る、然もお世辭にモウ一杯といふ、博士又聲に應じて茶碗を出す、危機一髪下婢は倉皇厨内に逃げ込み、之を主婦に訴ふ、主婦氣轉を利かして曰く、飯既に少なきを以て、新たに之を炊げり、十分に之を食せよと、博士厨下に至り、予の大食汝を煩はす、願くは推恕せよ、と厚く之を下婢に謝す。

◎五姓田芳柳、五家を潰す

畫伯五姓田芳柳、少時豪放大酒、江湖に飄零し、殆んど定住なきに至る、偶ま養子の口ありと雖も素行つひにをさまらず、財

産を蕩盡して後去る、斯くの如くして姓を改むること前後五回、故に自ら稱して五姓田といふ。

◎李鴻章、大久保利通の度胸に驚く

大久保利通、明治七年八月清國に使す、盖し臺灣案議を處理せんが爲めなり、辯論數回議容易に決せず、大久保一日李鴻章を議政堂に訪問す、談中忽ち聞く、大砲一發窓前に轟くを、大久保時に火を卷烟草に點じつゝあり、毫も怖るゝの色なし、李之を見て大に大久保の度胸の强きに驚き、それより談判大に捗る。

◎内村鑑三、水産を拋つ

農學士内村鑑三、札幌農學校に在り專ら水産學を研鑽す、卒業

後開拓使御用係となり、水産係を拜命す、當時開拓使は農業試驗場を各地に設け、專ら農業を奬勵す、鑑三曰く陸地一町歩に要する費用を以て、之を水産業に費せば、其所得果して幾何と縷々數萬言之を時の長官に建白す、數閲月何等指令なし、於是鑑三歎息して曰く、こんな譯の分らん長官の下に在つては到底我腕を振ふの餘地なしと、斷然辭表を提出して退く。

○黑田長成、内職を本ものになす

侯爵黑田長成、舊大名にも似ず、頗る計算に通ず、金子堅太郎を顧問として、盛んに貨殖の道を講じ、竹鍬を開いて今の福吉町を造り、莫大の地代家賃を取立つ、其味頗る甘きを以て、通

行門上麗々と、『貸家貸地管理所、黑田家』の看板を掲ぐ、京童之を見て曰く、『愈々内職が本ものになつた』

○正直正太夫の著書書肆の主人を怒らす

齋藤緑雨曾て『見切物』を著す、或人之れが有無を某書肆に質す主人怒つて曰く、『手前共では未だ見切者を賣るやうな零落は致しません』

○伊藤圭介、元氣益々盛んなり

傾學者伊藤圭介、九十九歳の高齡を重ねて歿す、曾て醫藥を飲みたることなし、圭介九十六歳の時、名古屋の知人湯本某、胃病にて入院せんとして上京圭介を訪ふ、快談數刻將に辭し去

らんとするや、圭介曰く、『明日横濱に盆栽會あり、招待を受く同道しては如何』と、某病氣の故を以て之を辭す、圭介曰く、『ナニ乃公が連れて行くから大丈夫だよ』

○西郷從道其師を擊つ

西郷從道、十四歳の春、四書五經の素讀を伊地知正治に學ぶ、幾回之を復習するも一字をだに記憶せず、其鉈を責むること愈愈嚴にして愈々鈍なり、正治痛く之を叱す、從道忽ち怒り突然起て正治の兩鬢を攫み、傍らの壁に押しつけて其頭を搖る、高崎五六等之を見て師に謝せしめんとす、正治笑ふて曰く、『止めよ、此兒讀書を以て名をなす能はざるも後來必ず大器たらん』

と。

○西郷從道、諸元老を驚かす

西郷從道、沈默寡言、滅多に人と議論するとなく、あれば天下を聳動すべき大議論をなす、一日元老會議あり、互ひに口角泡を飛ばして國事を論ず、會ま西郷從道席の一角に在り、ツト立ちて議長と呼ぶ、スワこそ彼の大議論と、元老一同片唾を呑み耳を聳てゝ之を聞く、議長の許可を得るや、乃ち容を正して曰く、『本日は我子供等を伴ふて相撲見物の約あり、最早其時間の來りたれば、之れより退場す』と、悠々として立去る、元老皆狐に摘まれたる心地にて、議論を中絶す。

○西郷從道、文部省に居睡りす

西郷從道、曾て文部省に大臣たり、是より先き省内の事務澁滯殆んど手の附けやうなし、西郷從道、之を下僚に分擔せしめ、己れは只徒らに盲印を捺して、大臣室に居睡りするのみ。而して澁滯事務解決、諸員皆之を恐る。

○今村清之助、友情に厚し

今村清之助、横濱に在り、友人某と親しむ、某曰く、友情を温めんとせば、金錢の貸借を慎むに在り、故にお互の間は如何に貧すればとて、堅く之を履行すべしと、茲に契約を結べり、然るに後日某大に失敗し、僅か二十圓の爲めに訴訟を提起さるゝ迄

の悲運に際會す、或夜獨り孤燈に對して默念する事久し、果然窓外石を投ずる者あり、驚いて之を檢すれば、銀貨二百圓の紙包なり、即ち是れ今村の友情に出でたるもの。

○淺田宗伯、束帶して宿直す

淺田宗伯、曾て宮内省東宮殿下以下諸親王、宮方の係醫となる宗伯獨り必ず束帶の儘、儼然として宿直す、衆其窮屈を察し、『お樂にお休みになつては如何』といへば、宗伯色を變へて曰く、『苟も皇宮に宿直す、造次顚沛も油斷し能はざること、軍人の戰場に於けるが如し』と。

○沼間守一、妻君を取違ふ

沼間守一、今川小路より他に移轉せんとす、恰も河津祐之の大阪より上京するに際し、舊宅を河津に讓與せんことを約す、沼間例に依て柳橋佳人の許に流連數日、夜更けて歸宅す、門鎖ざして開かず、勝手口より室内に入る、妻君既に華胥の域に遊ぶの時なり、沼間大に怒り、將に拳を擧げて之を打たんとす、初めて其樣子の異なるに心付き、能く〳〵見れば、河津の妻君なり、沼間の不在中、既に河津の引越し來りたるもの、沼間大に面目を失す。

○立見將軍敵前に眠る

日清戰役に際し、朔寧枝隊長として、勇名を聽かしたる立見少將、平壤の敵壘に達し、自ら敵情を視察し來つて曰く、『弱敵徒らに籠城するのみ、對陣して次回の進擊を待たん』と、直ちに松樹の下に肱を枕にして眠る、鼾聲恰も雷の如し。

○島田蕃根、再び人間を望む

島田蕃根翁、人に語つて曰く、『予は八十までも長命したおかげで、日露戰爭も見る事が出來たし、其外いろ〳〵の境遇に逢ふて、隨分愉快だつた、此次ぎの世にも、どうか外の者に生れ變らず、同じ人間に生れて來たいものだ、佛樣や神樣では、到底こんな面白い事は見られまいから』と。

○中井弘、大久保甲東を馭者となす

中井櫻洲、一日參議大久保甲東を訪ひ、某所集會に同伴せんとを約す、馬車同乘、行く事數町にして、櫻洲試みに馭者たらんと立つて馭者臺に就く、將に會場に近づかんとするや、馬進まず、暗に甲東の助力を乞ふの狀を示す、甲東立つて櫻洲を叱し、自ら櫻洲に代る、馬進むと舊の如く、速力層一層を加ふ、甲東頗る得意の色あり、而も櫻洲は主人公を氣取り愈々得意たり、見る者一同啞然たり。

○中井弘、岩倉對大久保の碁盤を轉覆す

岩倉具視、大久保利通數友と某樓に宴す、二氏共に圍碁の好敵手、相會すれば必ず雌雄を爭ふ、此日また例に依つて黑白の

戰に餘念なし、座爲めに興を失ふ、時に中井弘側より躍り出で、盤を執つて轉覆し呵々哄笑す、是に於てか滿座始めて春を生じ、賞與として大杯を中井に屬す。

○中井弘、木戸孝允を欺く

中井弘、東京府判事を辭し、將に歸藩せんとす、一日府廳の官馬に跨がり、木戸參議に暇乞ず。參議其馬の亞剌比亞產にして頗る駿足なるを見、之を中井に所望す、乃ち之を三百圓にて讓り、其金を懷中に收めて歸る、翌日一書を馭者に裁し、之を參議に送る、昨日の馬實は府廳の官馬なり、乞ふ之を返へせ、三百圓は一時旅費に拜借せんと、參議呆然自失、又彼奴に一杯食は

されたかと、遂に其馬を取者に渡す。

○中井弘、三十圓の花瓶を三千五百圓に賣る

中井弘、一日板垣退助を其邸に訪ふ、床上珍奇の花瓶あり、賞賛稍々久しく、遂に一時之を借用せんと持ち歸る、果然翌日に至り、膝掛一枚(價三十圓内外)に謝狀一通を添へ之を板垣に送る、後板垣の伊藤博文を訪ふや、該花瓶は其の床上に麗々と飾らる、之れ中井より買受けしものにして、其價三千五百圓。

○中井弘、井上、芳川の二人に饗せず

中井弘、築地に一宇を新築し、伊藤、井上、芳川の三氏を招ぎ午餐を共にせんことを約す、期に及び伊藤一人來りて、他は未

だ來らず、依て伊藤と共に對食快談稍々久ふす、數時を過ぎて井上、芳川の二氏來る、『公務の爲めに遲刻せり、飢餓腹を空ふす、請ふ速に一椀を饗せよ』と、中井曰く『歐米の文明を裝ふ二君にして期に違ふ、他評を奈何せん、午餐の定刻既に了る、亦如何ともする能はず』と、遂に饗せず二氏空腹を抱へて去る。

○廣津柳浪、雅號の爲めに退社す

廣津柳浪、未だ世間に其名を知られざるの時、聘せられて讀賣新聞社に入る、入社の日人あり柳浪に向つて、雅號柳浪の意味を問ひ、且つ曰く、『苟も小説家たらんものは須らく雅號を撰まざる可らず、柳浪の號は如何にも面白からざるにあらずや』と

柳浪心竊かに其不敬を憤り、翌日直ちに退社屆を出し、再び出社せず。

○幸田露伴、周易を能くす

幸田露伴、箱根に入浴す、徒然なるまゝに筮竹を弄ぶ、旅客金員を紛失して大騒ぎをなす、主婦來りて之を露伴に計る、露伴咳一咳筮竹を取り、衆婢を呼び集めて曰く、此卦に依て見るときは、盜賊尚遠く去らず、三日を出ずして、捕縛せられ金員は必ず物の下より出づと、果せる哉、其夜金員は其儘蒲團の下より出づ、これ盜婢の薄氣味惡くなり、悔悟して蒲團の下へ入れしもの、於是乎爾後何事に依らず、幸田さん〳〵。

○渡邊國武、一家を治むる力なし

渡邊國武、曾て郷里小池某の養子となる、女あり甚だ醜、國武之を嫌ふ、國武高知縣令となり、單身赴任久しく音信を缺く、然も良二千石として、國武の評判朝野に鳴る、小池家大に氣を揉み、是非一度歸國して一家の整理をなさんとを求む、杳として音なし、小池家遂に怒つて曰く、『一縣を統ぶる才あるも、一家を治むる力なし』と、遂に國武を離縁す。

○新聞は營業でない

羯南陸實、英氣横溢、正々堂々たる筆を揮ふて日本新聞の墨に割據し、屢々筆禍を買ひて發行停止の厄に遭ふ、然も頗る平氣

なり、曰く『新聞は決して營業でない今日の日本新聞は別物だ』と獨り算盤珠の上に超然たり。

◎尾崎紅葉、田山花袋とサブライムを論ず

尾崎紅葉日光山中田山花袋に邂逅す、談偶ま文學論より、雄大の事に及ぶ、紅葉は雄大に多少恐怖の念を伴ふを說き、花袋は毫も之れに伴はざるを論じ、甲論乙駁口角泡を飛すの際、驟雨沛然、雷鳴四山に裂け、電光溪流に碎く、紅葉尙雄大を論及して何ぞ恐怖の念の伴ひたりとて、雄大を損ずる事あらんやと疾呼す、花袋曰く予は俄かに恐怖の念のみ高くして、雄大を感ずる能はずと萎縮す。

◎安田善次郎、石盤を以て手帳に代ふ

安田善次郎、勤儉力行の結果、優に八百萬圓の財產を得たり、然も其總てに於て頗る質素を裝ふ、紙製石盤の發明あるや、彼れは手帳に代ふに之を以てす、彼は常にポッケットに入れ、用のある時は記入し、終れば之を消す、家庭に於ても亦然り、テーブルの上に大なるもの一個を備へ、多忙なる彼は記しては消し、消しては記す。

◎副島種臣、李鴻章の毒氣を拔く

副島種臣、支那に使臣たり、李鴻章を官邸に訪ふ、鴻章倨傲不遜、種臣を睥睨す、種臣先づ其毒氣を拔かんとして口を開いて

曰く、『貴國は聖人輩出、中華と稱す以爲く、吏廉にして地潔く到底弊國の企及する所にあらずと、然るに足一たび、此地を蹈むや、汚吏は朝に滿ち、糞臭は市に載し、豫期皆心と違ふ、何ぞ中華と稱するを得ん』と言畢つて憮然たるもの久し、鴻章大に之を恥ぢ、爾來種臣を信ずること篤し。

◎大久保甲東の果斷

明治十年、西南暗澹として、殺氣濛々、然も西郷翁の叛旗未だ顯はれざるの時に當り、車駕京都に御幸す、大臣、參議供奉する者多し、大久保甲東後れて神戸に着くや、伊藤博文之を迎へ、相携へて汽車京都に向ふ、車中相對して、博文、縷々數萬言、

苧りに西南の狀況を報ず、甲東卷煙草を燻らしながら、薩摩辯を弄して『諾』『諾』と聞くのみ、而して其翌日俄然西郷翁、桐野、篠原等の官爵を褫奪すべき大命の下るに逢ふ。

◎益田英作は盜賊で御座らぬ

益田英作、曾て品川御殿山の阿兄と同居す、一夜品川町に火あり、馴染の藝妓亦類燒に罹らんとす、乃ち馳せて荷物を運ぶ、頗る重き行李を擔ぎ、喘ぎ〳〵御殿山を上らんとす、巡査あり呼び留めて曰く、『何處へ行く、貴樣は迂論の奴じや、調べる事があるから、兎に角警察へ來い』と將に引張られんとする時、英作火事頭巾を脱で、大喝して曰く、『益田英作は盜賊で御座ら

ぬ』

○乃木大將、好んでぼろ車に乘る

乃木大將、青山に住す、日々近傍鮫ケ橋を通行せざるなし、鮫ケ橋は府下有名の貧民窟なり、此所に住する車夫亦頗る汚穢、紳士淑女敢て之れに乘るを欲せず、大將獨り好んで常に此車夫を呼ぶ、而して拂ふ所の賃錢亦多し、車夫皆其德を慕ひ、尊敬すること神の如し。

○木戸、毛布を以て黑田を裹む

黑田清隆、內閣に於て木戸孝允と激論す、黑田餘憤未だ醒めず直ちに木戸の私邸を訪ひ、猶論ずる所あらんとす、木戸百方黑

田を慰藉すれども聽かず、將に拳を揚げて木戸を擊たんとす、木戸急に起ち、傍の毛布を取て黑田を裹む、黑田腕力に於て木戸に及ばず、其爲す所に從ふ、乃ち木戸家令を呼んで曰く、『此荷物を黑田さんの馭者に渡せ、旦那は今晩御泊りだから之を持て歸へれと云へ』と、黑田遂に閉口す。

○山縣有朋、名妓と接吻す

山縣有朋、曾て新橋某樓に遊ぶ、妓あり、容姿佳麗、應待亦盡せり、或人有朋に言つて曰く、彼は當時流行ッ兒にして、新橋切つての名妓なり、然るに未だ彼に卑行淫事のあるを聞かず、若しも猥褻談をなすものあらんか、忽ち脫兎の勢ひを示し、到

底當るべからず、且つ未だ人に接吻を許したることなし』と、山縣曰く、『若し我と接吻せば如何』、或人曰く、『僕が別墅を賭せん』と、即ち山縣懷中より一圓銀貨を出し、之を口に銜み、妓に向つて『手を出さずして之を取らば汝に遣はさんと言ふ、妓忽ち口を出だして之を取る、山縣曰く、『どうだ乃公に及ぶものはなからう』

◎星亨、官の字を忌む

星亨、元來傲慢不遜の性質にて、人の下に立つことを嫌ふ、人其姓を呼び捨てにすれば、彼れも亦其人を呼び捨てにす、而して平素民會官卑を以て自任し、兎角官の字を忌むこと蛇蝎の如し

故に彼は裁判官を呼ぶに裁判人といふ、人其不遜を責む、彼曰く、『辯護士を呼ぶに辯護人といふではないか』

◎松本重太郎信用せられず

歐米心醉の時代、神戸外國人某、粗製毛布を陸軍省に納め、暴利を得、松本重太郎、之を聞て憤慨し、上等品を撰んで、陸軍省へ納めんとす、許されず、止むなく或る外國人の名義を借りて之を納む、忽ち採用されて其上等品の聲省中に振ふ、後松本重太郎陸軍省に出頭し、聞くに先日の毛布如何を以てす、役人口を揃へて曰く、『流石は外國人、價格廉にして、品質佳なり』と、後其實を聞き、役人何れも啞然たり。

◎若尾逸平、圍碁に醉ふ

若尾逸平、圍碁を好むと、三度の食事よりも太甚し、一日大隈邸に於て、某客と烏鷺の爭ひをなすや、敵手妙出殆んど防ぎ難し、逸平考案數時、遂に石を握りたる儘ウーンと昏倒して前後を知らざるに至る、乃ち水を吹き醫師を呼び漸く息を吹き返へさしむ、後歸宅せしめんとするや、逸平曰く、『まア待つて下さい、今の勝負を片づけてから歸りましやう』

◎角田眞平、妻君を華族の令嬢と間違ふ

角田眞平、曾て待合に遊ぶ、女將窃かに眞平に耳語して曰く、『旦那に奢らせるとが出來ましたよ、華族の令嬢でしてねー、

明眸皓齒それは〳〵天性の美人の方がさ、旦那に是非と言はれるんですよ、だから一度招んでおあげなさい、人助けと思ふて』と、いと眞面目なり、眞平初の中は之を信ぜざりしが、再三再四繰返すを以て、之を眞に受け、或日盛裝美服得々として出懸く、女將乃ち電話を以て之に報ず、間もなく來るあり、眞平眼尻を下げて之を見れば、何ぞ圖らん我女房ならんとは、是れ蓋し友人某のいたづらに出づるもの。

◎福羽美靜、門前に制札を建つ

福羽美靜、曾て角筈に在り、俗客來訪永居に閉口す、或日入口に制札を建つ、

このうちは庭前狹し席せまし長尻の人注意ものなり

それより來るもの皆永居をせずして歸る。

◎木戸孝允、既に音曲師たらんとす

木戸孝允、鄕里長州に在り、一寒士たるの當時、音曲の稽古をなす、生來慧敏忽ちにして上達す、師其上達を見て曰く、『汝の咽は素性よき故今一息にて本職になるを得べし』と、孝允之を聞て大に驚き、予は消閑の爲め之を學ぶのみ、音曲を以て本職とするに至らば由々しき大事なりと、即日其稽古を廢め、再び音曲に接せず。

◎江原素六の眼に映じたる吉原

基督教界の名士江原素六、常に精神的方面にのみ運動して、嘗て足不潔の地を踏みしことなし、芳原の繁昌を耳にするや久し、一日試みに之を見物せんと欲し、早朝てく〳〵同所に赴く、寂として人影を認めず、只高樓の櫛比するを見るのみ、即ち歸つて人に語つて曰く、『芳原は繁華なる場所と聞いて居たるが、余の眼に映ずる所は大に然らず、頗る寂寞を極たるものなり』と。

◎外山正一、外人に縛せらる

外山正一、米國ミチガン大學に在り、亂暴狼藉至らざるなし、或時米國書生と爭鬪し、遂に之を傍らの池中に投ず、米人之を聞て大に激昂し、正一を郊外に誘出し、埋葬地の樹木に縛して

去る、正一玆に在ること一晝夜、腹はへり、體はしびれ、又如何ともすること能はず、只天を仰いで前非を悔ゆるのみ、偶ま相識の婦人通過するに逢ひ、初めて縛を解かれて歸る。

○都築馨六、藝者を恐る

都築馨六、東京大學文學部を卒業し、將に歐洲に留學せんとするや、學友爲めに送別會を開く、馨六未だ世事を解せず、席上藝妓の在るを見て、大に怒り且つ泣く、衆皆其何故たるを問ふ馨六涙を抑へて曰く『藝者を呼ぶとお母さんに叱られます』

○後藤象次郎、お芋を託せらる

後藤象次郎、農商務大臣たりし時、一日大磯灣頭を漫歩す、村

童あり、芋を食しつゝ其傍に來る、つく〴〵象次郎を眺めて曰く、『おぢちやんは東京から來たね、今奇麗な貝を取つて進げるから、此お芋を持つて居てお呉れ！』といひつゝ、袂からまだうでたての薩摩芋二三本を出して象次郎に渡し、磯邊に駈け往き、いろ〳〵の貝數個を拾ひ來つて、其内三個を象次郎に與へ預けたる芋を請取り、以前の如く之を食しつゝ去る、象次郎之を見て呆然たり。

○後藤新平、臺灣移住者を以て石鹼玉に比す

後藤新平、臺灣に民政長官たりし時、論客あり、内地人の爲めに種々の理窟を吹ッ掛く、新平先づ例の手段にて、彼が毒氣

を拔かんとして、曰く、『君の論至極尤もなり、併しながら飜つて移住の內地人を看よ、何れも石鹼玉のやうな、吹けば飛ぶ內地人のみなるを奈何んせん』と、論客すかさず曰く『足下は歐米人か、支那人か、將た露國人か』と、新平苦笑竟に腰を卑ふす。

◎雨宮敬次郎、類燒を喜ぶ

雨宮敬次郎、曾て橫濱に在り、生糸の仲買をなす、漸次生糸の價格暴騰するを豫知するも囊中一物なし、歸國して資を父に乞ふ、從來彼に注込むこと多きを以て、敢て肯んぜざるのみならず再び出鄕することを禁ぜり、依て彼は沈思默考只天を仰いで

嘆息するのみ、飛報あり、橫濱の家屋類燒すと、是に於て、一策を案じ父を欺いて曰く『斯くなる上は、鄕里に止り、孝養をなすに若かず、然りと雖も多少該地に負債もあり、且つ取引もあれば、幸に五十金を與へよ』と、父之を眞に受く、乃ち此金を受取るや、直ちに信州に赴き、竟に多額の利益を得たり。

◎田口卯吉、貧兒を泣かしむ

田口卯吉、一日本鄕の貧民學校に臨み、可憐薄倖の兒女を視て坐ろに同情の念に打たれ、且つ慰め且つ勵まして曰く、『予も幼時卿等に劣らざる苦痛を嘗む、今卿等を見て轉た懷舊の情禁ずる能はず』と、且つ說き且つ泣く、滿場爲めに寂然、小き袖を

絞らざるもの一人もなし。

○圓朝、燒芋を食ふて天下に名を出す

圓朝幼にして學問を好み、且つ講談を嗜む、然るに家貧ふして資を投じ師に就くこと能はす、常に僅に燒芋を山海の珍味として、只管勉强し、竟に其功積みて、天下に名を知らるゝに至る。

○三昧、浪六差配を恐れしむ

三昧道人、毎夜人靜りて、丑滿告ぐる金龍山の鐘の音に誘はれ腕を組み頭を垂れ、墨陀の堤上を徜徉す、警吏既に之を知り、或日差配人に至り、深夜の散歩は成るべく愼むべき樣本人に忠告せよといふ、差配人答へて曰く『彼は新聞記者にして、我々

の意見を用ふるものにあらず』と、警吏曰く『然らば店請人より申聞かすやう取計へ』と、『店請人は浪六、尙以て並ならぬ强の者、到底私風情の手際には參らぬ』

○常陸山、米國人の膽を拔く

常陸山の米國に遊ぶや米人皆其偉大の體格に驚く、歐米人從來日本人の倭小なる體軀を見て、心竊かに輕侮し居れり、然るに大山のゆるぎ出だせるが如き、常陸山に接し、種々の臆說をなすものあり、曰く是れ日本人にあらず、他國人なり、曰く日本人とすれば、變形兒なりと、偶ま常陸山に就き聞く者あり、貴國には君の如き體格を備ふるもの尙ありやと、常陸山曰く、

我國の片田舎には、我等の如きもの比々皆然りと、聞く者悉く膽を潰さゞるはなし。

○河野廣中、腕押に勝ち相撲で負傷す

猶興會の代議士、廿四議會の無事に閉會を告ぐるや、祝賀會を某旗亭に開く、宴酣にして腕押を初む、舌戰の勇士、何れも力瘤を出して奮鬪す、河野廣中不思議の力を有して、全勝を占む、某代議士口惜し紛れに躍氣となり、袴も衣裳も脱ぎ棄て、赤裸々となつて、相撲を求む、廣中亦後へは退けず、むんづと取組みエンヤ〳〵の聲暫し鳴りも止まざる中、廣中左の肋に負傷し、引分となる、廣中曰く『腕押だけでよせばよかつた』

○副島伯、代議士を冷笑す

刺を通じて、副島伯に面接を乞ふもの多し、伯之を五月蠅しとせず、一々應接間に通じ、快談奇語間ま來訪者を驚殺せしむ、一日某代議士來りて伯を訪ふ、代議士未だ口を開かざるに、伯卒如として曰く『目下鰻の相場は幾何かねエー』と、代議士之を知らず、伯啞然として曰く『嗚呼そうかねー』と、頗る冷笑の意を示す、代議士談話を交うると能はず、顏を赧め頭を搔いて倉皇辭し去る。

○後藤牧太、淑女をして自失せしむ

科學界の泰斗後藤牧太、學生の當時某家に寓す、淑雅たる令孃

あり芳紀正に二八、平素縁かに後藤にラブす、一日庭前に咲き香ふ櫻花二三枝を折つて、之を後藤に送る、後藤其厚意を謝しつゝ、頻りに之をむしりて、科學的研究の材料に供す、落英繽紛四周狼藉たり、令嬢之を見て忽ち癪を起す、是れ後藤の憤怒必ず茲に至りしものならんと誤認したればなり。

○伊藤博文、碁の助太刀を頼む

伊藤博文、大阪に在るの日、閑暇さへあれば、重野安繹を訪ふて碁を圍む、曾て勝ちたることなし、博文口惜しさにたまらず、何時か仇敵を打たんと思ふ折柄、偶ま東京の碁客某に邂逅す、碁客をして素人の如く裝はしめ、重野の宅に赴き、思ふさま烏

鷺の闘爭に、重野をして顔色なからしむ、博文手を拍つて曰く、嗚呼積日の恨み今日に晴るると。

○戸水博士、周易に通ず

七博士の隨一人として、國際問題に花を咲かせたる法學博士戸水寛人、羅馬法に精通し、哲學的頭腦を有す、是れ世人の普く認識する所、又博士は人知れず、易學を根本通明に學び、研鑽頗る勉めたるを以て、根本翁易簀の後は、寥々たる我易學界に在りて、優に深玄の理を極め、造詣最も深遠たり、或人評して曰く、博士は博士で飯を食ふ能はざれば、更に周易で身を立つる亦難きにあらずと。

○鈴木藤三郎、能く人材を登用す

製糖王鈴木藤三郎の部下を使用する、最も其實務に通曉せしめんとを勉む、學生あり、其部下に採用せられんとを求む、乃ち最初は石炭を擔はしめ、次は工場の草を取らしめ、次は火夫たらしめ、次は汽罐の油差したらしめ、以て其勤惰を監視す、學生能く苦痛を忍んで、滿足に命令を守る、於是乎果然學生を擢んで、一場の取締たらしむ。

○齋藤實、後藤新年に酷めらる

齋藤實、少年の頃伊澤縣の給仕たり、彼は溫厚篤實にして、他と爭ふを好まず、一意專心上長の命令を守る、當時彼より長

ずる事一歲、凋黨不羈にして、人を人とも思はず、慢に他に向ひて格鬪を挑む少年あり、同じく給仕を勤む、彼は常に此少年に酷められて、泣きしこと幾回なるを知らず、此少年を誰れとかなす、後藤新平即ち是れなり。

○田子理學士、坊主に怒らる

田子理學士、山椒魚の研究に依て其名あり、一日北風凛烈肌を襞かんとするの候を冒し、東北地方に赴いて山椒魚數尾を捕獲す、歸途新聞紙に包み、中等汽車室の網棚に置く、山椒魚は冬日多く睡眠する者なるも、湯氣の溫暖加はるに隨ひ、漸々眼を覺まし、キョロ〳〵甸匐出し來りて、其下に在る僧侶の頭上に

落つ、僧侶大に怒る、學士狼狽、閉口、頓首、再拜、低頭、平身漸くにして、事なきを得たり。

○品川彌二郎、菓子の偷み食ひ

品川彌二郎、生來甘い者を好む、座右甘菓なくんば、一刻も其所に坐し居る能はざる程なり、故に常に胃病を患ふ、妻女大に心配し少量のビスケットを宛てがひ、其慾情を押ふ、然るに尙之に慊らず、そこらあたりを獵りて能く摘み食をなす、妻女之を知り、大に諫むれども聞かず、止を得ず、遂に菓子を密封して保存す。

○西郷隆盛、家僕に謝ず

西郷隆盛、家僕あり、熊と呼ぶ、眼中一丁字なきも、剛毅能く理義を解す、出入起臥總て共にす、一日太政官よりの歸途、骨董店に刀劍を素見す、偶ま容姿艶麗、服飾鮮美たる美人あり、隆盛窃かに注目して曰く、『熊、予も彼のやうな正宗を買度ものなり』と、熊大に怒り、爾後三日間何等言はざるのみか、總ての用務を缺く、隆盛殆んど窮す、三日目に至つて熊を呼び、大に前言を謝して熊の怒を解き、始めて三日間の飢を療す。

○石黑忠悳、蕎麥湯に飢を醫す

石黑忠悳、學生時代頗る貧す、一日散歩空腹に堪へず、トある蕎麥屋に飛び入る、かけ、もり、天ぷら、五もく、おかめと順

次蕎麥の價格を問ふ、然も囊中一文なきを奈何せん、最後に蕎麥湯の代價幾何なるを質す、女中默して答へず、乃ち茶碗を借り、蕎麥湯をしこたま呑み、空腹を醫して去る、女中曰く、吃度あれは狂人ですよ。

○守田寶丹、恩人に邂逅す

守田治兵衛賣藥調劑に苦心する久し、文久二年コロリ大に流行す、偶ま武士風の客あり、處方箋を持ち來つて調劑を求む、頗る異なり、其客に依つて始めてコロリの妙藥を知る、試みに之を調合して病人に投ず、効能神の如し、乃ち大に之を賣出し大儲けをなす、今の寶丹是なり、爾來之が恩を報ぜんが爲め、其客を搜すこと年あり、偶然此恩人に邂逅す、燕舞雀躍、禮を厚ふして當時の恩を謝す、彼亦守田寶丹の義理堅きに驚く。

○德富蘇峯同一の書狀三本を認む

德富蘇峯、如何なる地に在るも、如何なる用務あるも、父母に消息せんとするときは、必ず同一の書面尙二通を認む、一は曰く國民新聞社、一は曰く令夫人。

○山座局長、狂亂は仕らぬ

舊岡山藩主、同藩出身知名の士を招ぎて宴を張る、政務局長山座圓次郎亦會す、局長大酒家を以て名あり、杯悉く局長の左右に集る、局長飲み干して豪壯益々昂る、氣焰口を衝いて現

代の名士を罵倒し、餘瀝伊藤統監に及ぶ者甚だ多し、統監之を聞て西園寺首相に通ず、首相局長を召し責めて曰く『君酒量を過し狂亂せしならん』と、局長嚴然襟を正して曰く『如何に酒を飲むも、山座局長狂亂は仕らぬ』

◎田口卯吉、一の餘財なし

田口卯吉、經濟雜誌發刊以來、玆に三十年に垂んたり、其號數殆んど一千三百五十號、曾て休刊したる事なし、彼が如何に經濟思想を吾人に與へたる乎は、これに依つて證明し得べし、彼は其富巨萬を重ぬるを得べき才識と地位を有しながら、死後其產を檢するに、殆んど一の餘財なし、蓋し彼は自己の家產を增

殖せんが爲めにあらず、專ら公共的利益を計らんが爲めに活動したればなり。

◎井上角五郎、醫者の資格なし

蟹甲將軍井上角五郎、初めて廣島より上京するや、濟生學舍長谷川泰の食客となる、醜面弊衣、夥多の書生中曾て見ざる所然も才氣捨つべからざるものあるを以て、學費を給して慶應義塾に入學せしむ、人あり問ふて曰く『如何なれば彼を我手許に置かずして、慶應義塾に入らしめしぞ』と、泰答へて曰く『彼の如き面體にては、病者も彼の手にかゝるとを好まざるべし』

◎井上角五郎、福澤翁に見込まる

福澤翁に令嬢あり、妙齡に達す、適當の敎師なし、慶應義塾中誰彼と、指を屈するに人なきにあらねど、所謂適當とするもの の人選に窮す、相手は妙齡の處女、もとよりハイカラの今業平には託すべくもあらず、千思萬考遂に井上角五郎に決す、翁獨語して曰く『之ならば大丈夫』。

○桂舟、死を宣告せらる

桂舟、幼時肋膜炎に罹り、東京府々立病院に入る、經過甚だよろしからず、漸次危篤に陷る、院長ブツケマンヒを投げて竟に死の宣告をなす、父母枕邊に在り、涙ながらに問ふて曰く『何なりと最後の望みはなきや』と、桂舟枕を擡げて曰く『どうせ

死ぬなら澤庵で茶漬を腹一杯食つて死にたし、兒が終焉の願ひはこれのみ』と、そは易きことなりとて、直ちに膳をすゝむれば、一杯、一杯、又一杯竟に五杯を傾け、『これにて思ひ置くこと更になし、どれ死なうか』と枕に就きしが、その翌日病けろりと治す。

○弘田博士、三井家の招聘に應せず

弘田醫學博士、或夜富豪三井家の小兒病氣にて往診す、案外の大患なり、依て主人の立合を求む、三太夫迷惑がりて曰く『主人は既に臥床す、到底其需めに應じ難し』と、博士大に怒りて曰く、『當家の富豪は我能く之を知る、然りと雖も、愛兒の大患

に當り臥床して出で來らざるは何ぞや』と、氣焔虹の如く、以後如何に同家より懇請し來るも、決して足其門を踏まざるに至る。

○福地源一郎、頑固黨に言論の自由を說く

福地櫻痴居士、戊辰騷擾の際、彰義隊の美擧と題する一篇を江湖新聞に揭ぐ、官、居士を陣屋に引いて大に之を責む、居士筆を借りて、一氣に十餘枚の陳情書を呵成し、且つ言論の自由を說く、屬吏各々其文を通讀し、感嘆私語して曰く『此奴中々筆まめである哩、助けて置いたら又何かの役に立たん』と、遂に縛を解く。

○鳩山和夫の演說米櫃に響く

法學博士鳩山和夫、嘗て帝國大學に敎授たり、卒業證書授與式に際し、法科を代表して演壇に登る、滔々法律の効用を述べ、更に論鋒を一轉して曰く、『兎角大鯰が細かな網の目を遁れんとす、網の効用夫れ何れにある、網は網なり、所謂巨口細鱗之を一網に打捕らずんばあらず、諸君若し裁判官とならば、片端より檢擧せよ、必ず意外の獲物あらん』と、極力諷罵冷嘲の口調を以て諧謔一番す、臨場の顯官相顧みて顏を揚ぐる者なし、於是乎數日を出でずして、免官の辭令に接す、和夫哄笑して曰く『屹度斯う來るだらうと思つたが、幾らか米櫃にまで此演

說が差響いた』

◎今村清之助アイスクリームに震へ揚がる

今村清之助は信州の人、夙に横濱に出で貿易業に從事す、一日某船長に招かれビールの馳走に接す、苦味舌を衝くを以て、忽ち顰蹙す、後アイスクリームを出す、そつと之を嘗むれば口中に沁み渡つて、其座に堪ゆる能はず、色を變じて竟に退く。

◎鳥尾得菴、槍を坦山に擬す

原坦山の初めて鳥尾得菴を訪ふや、寒暖の辭未だ終らざるに、得菴卒然梁間の長槍を執り、大喝一聲之を坦山の胸間に擬す、坦山忽ち體を飜へし、席に横臥して鼾聲を發す、得菴槍を捨て

座に復して曰く、『イヤ如何も失禮何卒此方へ』と、坦山悠然として起ち、斯くて初對面の挨拶をなす。

◎阿部吾市、人の寢息を窺ふ

茨城採炭會社專務取締役阿部吾市、貧家に生れ、夙に悲慘の境遇に陷る、然も頗る勉强家たり、少時某質屋の丁稚小僧となる、晝間はまめ〳〵しく能く働き夜に入るや朋輩に勸むるに、速かに枕に就かんとを以てす、己れは早く眠りたる眞似をなし、朋輩の寢息を窺ひ、窃に蓐を離れ、孜々として讀書算術を勵み、鷄鳴を待つて初めて眠るを常とせり。

◎武内桂舟、大食人を驚かす

畵伯武内桂舟、大食家たるを以て知人に鳴る、一日友人と共に芝居見物に出懸く、普通辨當三人前をペロリと食し、後上等の鰻丼三碗を平らぐ、友人其害を說く、桂舟平氣の顏にて『尙此上に御馳走あれば、優に三人前は引受ける、僕の胃袋は十分鍛へに鍛つてあるから、諸君のやうな風船玉とは大に違ふよ』

○中井弘、奇策を以て妻を娶る

中井弘、一日嬋妍たる美人を見て、垂涎三丈追慕の情禁ずる能はず、遂に一策を案じ、盛裝して其女の門を過ぎ、僞りて溝に落つ、女家の人遽てゝ之を救ふ、弘匍匐して門內に入り呻吟痛苦に耐へざる狀を示す、家人介抱周到、女亦懇切を極む、翌日

更に贈物を齎らし、慇懃其恩を謝し、閑談數時巧みに家人を籠絡す、爾來日夜出入、遂に一家の歡心を得て之を娶る。

○末松謙澄、裸體にて人に接す

男爵末松謙澄、盛夏家に在るや、常に赤裸々の儘庭園を徜徉す、來客あるも敢て之を意に介せず、夫人諫めて曰く『客ある時は願くは衣を着けよ』と、謙澄哄然として笑ふて曰く『之れ應に天眞爛漫たるべし、何ぞ人の爲めに自然に背く可けんや』と。

○添田壽一、國旗を小學生徒に敎へらる

添田壽一、日露戰役後、聯合艦隊司令長官東鄕大將等、國民歡呼の裡に凱旋するや、其一行を海軍省附近に迎ふ、綠門の上

遙かに列國の旗章翩々として微風に翻る、添田壽一、馬越恭平、園田孝吉等の面々、之を評し合ふ、偶ま青白赤の三色より成り、中央白色の部に鷲鳥蛇を喰へて、將に冲天せんとするの國旗に至り、其何れの旗章なるを知らず、思案投首稍々久ふす、傍らに兒童あり年齡八九歳、突如として進み出でゝ曰く、『アレですか、アリア墨西哥國のではありませんか』

○細川護久、能く前約を守る

華族會議あり、細川護久を議長席に就かしめんとす、議事法に嫻はざる故を以て之を辭す、衆聽かず、只議長席に默座すれば可なりといふ、於是乎之を諾す、議事始まるや、忽ち議長々々

の聲四隅に起る、然も默然たり、衆皆怒る、或は讒謗し、或は罵詈し、議場忽ち紛然、笑聲交々起る、一議員あり、窃に背後より其袂を引き、耳語して議事の順序を示す、細川怫然として曰く、『我當初辭す、只默座すれば可なりといふ、故に我能く前約を守るのみ』

○成島柳北、石井南橋と遊ぶ

成島柳北、一日石井南橋と某樓に遊ぶ、樓主二人の名士たるを知り、唐紙二枚を持參し、揮毫を需む、南橋先づ筆を執つて、「柳北遊北柳」の一句を書す、柳北之を見て直に筆を執り、對して曰く「南橋隱橋南」と二人相顧みて一笑す。

○原坦山、佛教に負けて坊主となる

拙者儀即刻臨終仕候との手紙を發して死したる原坦山、未だ佛門に入らざる前は儒學專門の人なり、一日栴檀林の僧徒と論爭す、僧曰く『我若し汝に負くれば汝の弟子とならん、汝若し我に負けなば我が弟子となれ』と、契約既に調ひて議論沸騰す、三日三夜激論を繼續し、遂に坦山の敗に歸す、坦山直ちに髮を削りて僧侶の仲間入をなす。

○金子堅太郎、貴族となる

金子堅太郎、曾てハーバード大學に在り、米人彼が身分を質す、答ふるに士族を以てす、米人士族の何たるを知らず、重ねて之

を彼に問ふ、彼曰く『士族とは米國にていふ貴族の類なり』と、爾來彼を尊敬すること太甚し。

○小野梓、厠に書架を設く

小野梓、痔疾を患へ、苦痛を感ずること久し、偶ま厠に入れば凡そ二時間の長きに渉る、彼れは讀書を以て生命とし、常住坐臥嘗て書物を釋てたることなし、厠に入りて尙爾くありや否やを怪むものあり、縞に之を窺へば、彼は顏を顰めながらも書物に對す、實に其厠には書架を設け、和漢洋の書籍、累々堆積せるなりけり。

○福澤翁、一升桝を傾く

福澤翁、曾て郷里に歸る、故山の山水昔ながらの姿なつかしく笑ふて其人を迎ふ、滯留數日一日市中を漫歩す、少壯の頃、常に酒を命じたる舗の依然たるを見て今昔の感に堪へず、乃ち一升桝を取り、家媼を顧みて曰く、『二十年前屢々汝を勞せしが、今は全く酒を嗜まず、水を以て之に代へん』と、自ら屋後の井に行き、水を桝に盛り滿を引て曰く、『昔の事は幾歳になつても忘れられぬ』

○岩倉具定、駝婦になぐらる

公爵岩倉具定、一日自轉車に乘り、意氣揚々某街を駈け廻る、折柄貨物を滿載したる一輛の荷車あり、夫は先棒に、婦は後押

をなしつゝ、エンサカホイの掛聲勇ましく進み來るに逢ふ、公爵之を避け兼ね、遂に婦の臀部に衝突し、婦其場に倒れ、公爵亦其上に轉覆す、婦忽然蹶起、公爵を投つけ、鐵拳忽ち公爵の頭上に飛ぶ、公爵堪らず、自轉車を捨てゝ這々の體にて遁げ去る。

○細川潤次郎、新聞の効能を説く

細川潤次郎、夙に海外の事情に通ず、明治の初年、創業時代の新聞紙が、往々詭言を弄して、政府を攻擊することあり、當路者大に之を憂へ、寧ろ新聞紙の發行を廢止せしめんとするの議あり、潤次郎之を聞き、一の建議書を携へ、當路者に之を示し

且つ說いて曰く、『新聞紙は文明國に一日も缺くべからざる利器なり、之を廢するは絶對に不可なり』と、乃ち其の事止みて今日に至る。

◎井上角五郎、且つ喜び且つ恨む

井上角五郎、北海道炭礦會社に在り、偶ま安田善次郎の訪ふあり、機械の整備、事務の敏活を見、大に之を嘆賞して曰く、『君は口許りの人と思つて居たに、手も亦八丁だねー、確に實業界で成功するに相違ない』と、井角大に喜び、我を知る者は、夫れ安田翁かと、意氣昂然たり、安田之を戒め且つ耳語して曰く、『ダガ君も亦當世的才子かも知れぬ、炭を運ぶだけの停車場

に彼の華美の設備は如何、アレでは他にも推測せらるゝ事があらうよ』と、井の角之を聞て『ウフン』。

◎板垣伯、人に接する百舌鳥に及ばず

板垣伯、百舌鳥を愛す、人あり其邸を訪ふ、過つて百舌鳥の籠に觸るゝや、伯滿面に朱を注ぎ、叱責罵倒當る可らず。

◎望月小太郎、隆鼻を挫かる

望月小太郎、曾て倫敦に遊ぶ、英國ゼントルマンに模倣し、ハイカラを裝ふこと太甚し、衆皆之を憎む、一日公使加藤高明、在留日本人會を開く、宴酣なるに及び、伊東祐侃と葛藤を釀し、揚句の果ては組打を始む、祐侃の力や勝りけん、遂に小太

郎組敷かる、衆視て之を快とす、何時果つべきにあらざれば祐侃を扶けて起たしめんとす、祐侃起つに隨ひ、小太郎亦起つ何ぞ圖らん、小太郎の鼻梁骨に祐侃嚙みつき居らんとは、高明笑つて曰く『天狗の鼻もトウ〳〵嚙み挫かれたな』

○高島平三郎、老母を脊負ふ

高島平三郎、一日老母を伴ひて博覽會見物に出懸く、觀客雜沓容易に觀る可らず、眼光炯々、鬚髯漆の如く、而も六尺の體軀を以て白髮の老母を脊負ひ、一々説明をなしつゝ、悠々觀覽す、人皆其孝心に感ず。

○小川鉀吉、部下を愛撫す

小川鉀吉、明治製糖會社の社長たり、經營其宜きを得業務日を追ふて進み、嘖々實業界に喧傳す、或時製糖職工長を臺灣に派遣す、家族深川に在り、社長自ら留守宅を見舞ひ、萬事能く世話を燒く、職工長之を聞て感泣措く能はず、『此社長さんの爲めなら火の中へでも飛んで御恩報じをせにやならぬ』

○江木衷、駕籠夫の腕に嚙みつく

法學博士江木衷、曾て故郷をあとに將に東上の途に就かんとするの際、函嶺八里の難所にかゝるや、蛇蝎の如き駕籠夫とはしなく一場の爭論を開く、相手は二人の大漢、此方は一人而も十六才の少年、固より敵すべきにあらず、博士は幼時より負けず嫌

ひなるを以て、突然一人の利腕に嚙みつく、敵狼狽逡巡す、時に通りかゝる旅人あり之を引分く、駕籠夫曰く、『怖ろしい小僧だ』博士罵り返へして曰く、『今度乃公が立身して此山を通る時は汝等を大地へ這ひつくばせて見せる、この顏を能く見覺へて置け！』

○江木衷、退級を請願す

江木衷、大學豫備門の入學試驗を受くるや、學力優等三年級に編入せらる、江木之を喜ばず、實力充實ならずして上級に在る何の益か之れあらん、三年級に入るの學力を有し、一年級より始めんには、落第の憂ひなくして常に餘裕あり、此餘裕を利用

して別に研究するに若かずと、之を校長に請願す、校長之を異とし、請願を容れて更に一年級に編入す。

○桃中軒雲右衞門、木戸錢の高きを以て廣告に代ふ

桃中軒雲右衞門、浪花節を以て名あり、未だ今日の如く名をなさゞる時に當り、最も世の注目を惹くことにのみ心を用ゐ、身には絹布づくめの素晴らしき衣服に、五ツ紋の羽織を着流し、帶に金鎖をひらめかし、女房には頭に素敵なる櫛釵を體に御姫樣然たる裝束を爲さしめ、以て悠々として座に顯はる、加之普通五六錢の木戸錢に對し、十二錢を貪る、或人雲右衞門に言つて曰く、『君は華族のやうだ、木戸錢の高いのは華族樣を拜す

る爲めか』と、雲右衞門曰く『皆廣告の爲めです』

○平沼專藏、慾の皮益々突ッ張る

平沼專藏曾て病痾の冐す所となり苦悶を極む、人あり慰めて曰く『此苦痛は或は世間の恨みより來らん、若かず以後は利子及手數料を低減し、以て斯る苦痛を免れんには』と專藏之を諾す然るに病癒ゆるや、忽ち番頭を呼んで曰く『我病中貸出を怠り且利子の延滯多し、爾來一層嚴格にして、出來得る限り其利の多きを期せよ』と。

○岸田吟香、號銀公より轉化す

銀座翁岸田吟香、少時逆境に陷り、或は經師屋の手傳となり、

或は左官の手間取となり、以て一時の糊口を凌ぐ、翁の通稱銀次といふ、故に職人仲間は常に『オイ銀公〳〵』と呼ぶ、於是乎陸放翁の詩中『吟到梅花句亦香』の句を追想し、遂に吟香を其號と爲す。

○中村不折、巴里博物館に立往生す

畫伯中村不折、佛國巴里に遊び先づ**リユキサンブルグ**の博物館に至る、光彩燦爛目の球の宿替せんばかり、只茫然之を見詰るのみ、何等批評を下すこと能はず、宛も狐に摘まれたる心地にて立往生すること約六時間、翌日**ルーブル**博物館に至る、前日に比し尙一層吃驚仰天し、また立往生すること、十一時五十五

分五十五秒。

○中村不折、汽車を停む

畫伯中村不折、曾て某地方に旅行す、唐紙、絹地等を携へ來り て揮毫を求むる者多し、筆を呵して立處に數百枚を描く、發車に間もなきを以て、倉皇汽車に飛込んとす、驛長亦引止めて唐紙を出す、辭するに其時間なきを以てす、驛長其言を遮つて曰く、『五分や十分は停車させますから書いて下さい』と、竟に一枚一枚又一枚と數枚を描き、十分間の停車をなす、乘客之を知らず、何だ彼だと呟く者多し。

○武内桂舟、筍の頭を刎ぬ

武内桂舟、幼時毫も文事に心を寄せず、日夜惡戯を以て無上の快樂となす、既に學校に在り、尚且つ止まず、藩侯の邸園竹籔あり、筍簇生す、地上將に尺餘に及ばんとす、藩侯朝夕之を眺めて樂む、何者ぞ人知れず奥庭深く忍び入り、數多の筍の頭を悉く刎ね落す、侍人皆色を失ふ、藩侯之を見て敢て咎めず、微笑して曰く『やア筍を酷い目に逢はしたな、これも大方武内の惡戯小僧の所爲だらう』

○鳥尾將軍、遺子を三浦中將に託す

陸軍中將鳥尾小彌太、三浦梧樓と共に同輩の間に鳴る、而も各その氣質の相異なる所あるを以て、互ひに相反目して嘗て親交

をなさず、恰も犬と猿との如し、鳥尾臨終に際し、使を派して三浦に面會を求む、三浦往く、鳥尾病床に跪坐して曰く、『天下の廣き、兄を措きて我が子孫を託すべきの人なし、希くは兄夫れ我が子孫の爲めに計れ』と、三浦其意を領し、看護丁寧、鳥尾の歿後其遺言を守り、子孫の爲めに盡すこと少からず。

○香月恕經、痘痕に依て名あり

香月恕經、幼時痘瘡を患へ、容貌宛も噴火石の如し、恕經以爲く、此容貌を以て他日妻帶せんとするも、蓋し應ずるものなからん、人世の恨事之れに及ぶものなし、若かず、大に學事に勉め、天下に名を得たる後に於て、妻を娶らんにはと、恕經の痘

痕は、恕經をして名をなさしむるの救世主となす。

○增島六一郎、石井常右衞門を氣取る

辯護士增島六一郎、節儉にして蓄財あり、曾て花柳の巷に遊ばず、常に同業間に排斥せらる、某々等相計り、增島を待合に誘引し、思ふ樣赤耻をかゝして遣らんと、議一決之を增島に通ず增島之を豫知し快諾す、芝居に講談に、石井常右衞門の昔を聞き、其日、先づ竊かに五十金を女將に與ふ、已にして美酒、佳肴、杯盤に堆く、明眸皓齒酒間に斡旋す、女將美形等增島を優待すると衆に超ゆ、一座且驚き且怪み、問ふに曾遊を以てす、增島答へて曰く、『此家に遊ぶ今日を以て始めとなす、而も斯く

優待するものは、予が雷名の致す所ならん』と、一座唖然として一言を發するものなし。

○陸奥宗光、李鴻章を驚かす

日清戰爭の際、李鴻章媾和大使として馬關に來るや、陸奥宗光窃かに伊藤博文に告げて曰く、李翁中々の狡猾奴、決して油斷し給ふなと、後春帆樓に相會するや、右を追へば左に避け、前かと思へば後に現はれ、宛もぬらくら鯰の如く、殆んど捕捉すべからざる態度を示す、博文告ぐるに反省の餘地なきを以てす、李翁氣屈して將に辭し去らんとするや、宗光背後に在り、大聲疾呼して曰く、『矢張戰爭の方が面白いですかなア』と、李翁驚き顧みて苦笑す。

○米田侍從、楠公よりも忠なり

侍從米田虎雄、恩寵頗る渥し、聖上一日群臣を集め「楠正成」の題にて、各自能くする所に從ひ、詩歌文章を作らしめ給ふ、侍從文事に嫺はざるを以て只之を傍觀す、侍從に向ひ仰せらるには、文字を以て之を示さずとも、汝の思ふ所を述べて差支なしと、侍從襟を正ふして曰く、楠正成は忠は忠なりと雖も、米田侍從の忠には及ばずと。

○福澤諭吉、紳士を以て乞食に比す

某紳士あり、一日福澤諭吉翁を訪ふて、金の無心をなす、翁怪

訝な顔して曰く、『粗服を纏ふて人の門に立ち、僅少の錢を惠めよと乞ふもの世之を乞丐と呼ぶ、絹布を着け人の堂に上り、僅少の金を貸せといふもの、人之を紳士と稱す、惠めよと乞ふも貸せよと乞ふも、腰を黄金に屈するは一なり、乞丐是れ紳士、紳士是れ乞丐、其間髮を容るゝ餘地なし、豈に奇ならずや』と紳士慚愧して去る。

○乃木大將の武士道

或人一日乃木大將を訪ひ、談、軍事、政治、教育より始まり、漸次武士道に及ぶ、大將曰く、『武士道なる者は言ふべき者にあらず、行ふべき者なり。』と

○武富時敏、死を恐れず

武富時敏、容貌秀麗恰も處女の如し、然るに明治七年江藤新平の亂を佐賀に起すや、一兵卒として其軍に加はる、時に年二十歳、官軍三方より之を包圍す、或は逃げ、或は死し、或は大樹の蔭より僅かに敵を狙ふのみ、此時に當り時敏獨り泰然として正面に立つ「引け！」の號令あるや、初めて彈丸雨飛の間を悠悠闊歩す、其狀宛も死を恐れざるものゝ如し、於是乎其名軍中に揚る。

○福島將軍、めざまし時計となる

陸軍少將福島安正、少時勉强家を以て名あり、軍事喇叭の必要

を聞くや、直ちに之を傳習し、毎朝未明に起き出で、居宅を距る十町程に當り、東河原と稱する原野あり、此所に至つて、一意專心テッテケ〳〵吹き立つ、界隈のもの皆此音を聞て眼をさます、時人稱して福島のめざまし時計と云ふ。

◎中江兆民居士、臨終雲照律師に灰吹を擲つ

中江篤介、病革まるや、勝峰大徹禪師、老軀を提げて居士を寢床に訪ひ、臨終の信念を固めしむ、翌日雲照律師來りて、最後の引導を渡さんとす、居士妻をして辭せしめて曰く『吾は既に安心を有せり、又何の安心をか求めん』と、律師推して室内に入り、示す所あらんとす、居士怒つて枕を取り律師の面に擲つ、

律師尙進んで示す所あらんとす、居士更に傍らなる灰吹を取つて擲つ、龍怒り虎吼ゆるの光景、律師爲す所なくして歸る。

◎大江卓、窮して高利貸の娘を娶る

大江卓、少時豪放無賴、借金山を爲す、矢折れ策盡き、殆んど爲す所を知らず、沈思默考數月の永きに涉り、初めて一の苦肉策を案出し、敵軍に降服して、遂に高利貸の娘を娶り、一時を凌ぐ、然るに幾何ならずして又窮狀に陷る、糟糠の妻遂に其堂に居つかず。

◎松本順、勝海舟をへコます

松本順、勝海舟と友とし好し、一日海舟を氷川邸に訪ふ、海舟

曰く、『如何だ順、薬は賣れるかな』、松本曰く、『ソーサお前のやうな貧乏人が多いから一向薬は賣れんよ』、海舟苦笑して又他を言はず。

○山岡鐵舟、自筆の贋物を購ふ。

山岡鐵舟、書を以て一世に鳴り、床屋、溫泉場、寄席、待合、青樓等到る處に珍重せらる、鐵舟一日柳原を散策す、我書骨董店にあり、一見贋物たるを知ると雖も、筆意玄妙、遙かに我に勝る所あり、即ち之を購ひ來つて、我居室に掲ぐ。

○板垣伯、太刀山に相撲の手を敎ふ

板垣伯、相撲狂を以て名あり、力士太刀山と强敵常陸山との取

組あり、人皆太刀山の及ぶべからざるを說く、伯太刀山を愛すること深し、前日太刀山を呼び說いて曰く、『常陸は到底尋常一樣の手にては敵し難し、故に斯く〳〵の後、勇猛突進するに於ては必ず勝利を得んと』、太刀山之を聞て大に期する所あり、翌日其手を用ゐて、果して之れに勝ち厚く伯に禮を述ぶ、伯鼻をぴこつかせて曰く、『相撲の手は總て孫吳の兵法から割出したものぢや』

○杉浦重剛、妻を書生に擬す

杉浦重剛、書生を愛し常に數十人を養ふ、妻なきを以て萬事差問ふる事あり、偶ま友人千頭清臣の令妹あり、我意に適するを

以て、自ら談判して之を娶る、極めて質素の婚禮にして之を知るもの少なし、翌日に至り友人之を聞て、祝意を表する者あり重剛之れに答へて曰く『又書生が一人殖えました』

◎古莊嘉門、勝邸に隱る

古莊嘉門、慶應年間、亡命して勝海舟の家に隱る、熊本藩主、安場保和をして之を捕へしむ、安場命を奉じて海舟を訪ひ、古莊の在否を質す、海舟答ふるに不在を以てす、古莊、既に隣室に在り、机に對して大聲讀書す、安場之を知ると雖も、敢て之を追究せず、海舟の言を信じて歸る、爲めに古莊遂に虎口を免る。

◎大隈伯、大に氣焔を吐く

大隈伯、老いて益々盛んなり、頃日客に向つて曰く、『今の元老はカラ駄目だ、人がいくら抵抗しても、一向平氣で、抵抗しばえがない、既に抵抗力を缺けば最早やそれが墓場ぢや、此點に於ては、乃公と伊藤博文あるのみだ』

◎澁澤榮一、薩摩壯士の膽を冷す

澁澤榮一、曾て大阪に遊び、薩摩の人折田某に就き漢學を修む、時に薩摩壯士大に跋扈し、常に同門の他藩人を凌侮すること太甚し、榮一大に怒り、時々彼等を挫くあるも、毫も之を顧みず跋扈益々加はる、榮一奮然起つて之れが餓鬼大將たる三島通庸

を捕へ、高く宙に釣上げ金剛力を出して美事に之を地上に擲つ是れより薩摩壯士皆榮一に服す。

◎渡邊國武、倒れて學生を戒む

無邊俠禪渡邊國武、長善館の長たり、長善館は信州諏訪の學生を養ふ所、一日運動會をなす、綱曳の技あり、俠禪、學生數名を相手に油汗を流す、俠禪の力や勝りけん、數名の學生ずるりずるり曳かれんとす、學生其綱を放つ、俠禪忽ち轞と倒れて、全身泥塗れとなる、而も俠禪怒らず、慌てず、から〳〵と笑ひ徐ろに立つて曰く、『諸君は既に一の大藏大臣を顚覆せり、其手並を以て各大臣を倒し、後諸君之れに代らざる可らず』と。

◎渡邊洪基、福澤先生の餅を盜む

渡邊洪基、曾て慶應義塾に在り、或夜門生と雜煮を食せんとを議す、洪基一策を案じ、短刀を提げ、窃かに先生の表座敷に入り、床間に飾りある鏡餅を切取り來る、翌日先生の夫人之を先生に告げ、遂に洪基の所爲たる事露顯す、先生笑ふて之を戒む、後洪基大學總長となり、年賀の爲め先生を訪ふ、夫人微笑して曰く、『渡邊さん雜煮を馳走しましやうか』と、洪基往事を追想して曰く、『能くお忘れになりませんなア』

◎大久保一翁、元老院に居睡す

大久保一翁、元老院議官たり、勤勉衆を擢き、曾て缺席したる

ことなし、然も未だ一翁の發言したるを聞かず、衆皆之を異とす、議事將に酣ならんとするや、多くは卓に對してコクリ〳〵居睡を始め、隣席議員を驚かす、某議員之を見兼ねて一翁を咎む、一翁改つて曰く、『これでも起立は誤りません』

○岩崎彌之助、鳥尾得庵の根强きに驚く

岩崎彌之助、一日熱海某球戯場に入る、一偉丈夫あり、一技を挑む、彌之助之を諾して立會ふ、案外拙劣にして、幾度か之を破る、彌之助見兼て曰く、『あなたのお手際では私の相手にはなりません、お廢めなさい』と、彼聽かずして夜の更くるを忘る、彌之助根氣盡き、將に歸らんとするに當り其得庵なるを知る、

且つ驚き且つ謝して曰く、『足下は鳥尾將軍でしたか、道理で根强いと思ひました』

○三浦梧樓、菓子箱で失敗す

三浦梧樓、廣島鎮臺司令長官たり、一日舊友白井小介來訪す、梧樓家に在らず、小介菓子箱を遺して歸る、梧樓之を見、歎じて曰く、『小介も亦衰へたるかな、彼が如き亂暴者にして余に遺物するに至らんとは』と、年將に暮れんとす、菓子屋來つて曩日の菓子代を請求す、梧樓再び歎じて曰く、『小介まだ中々衰へん哩』

○雨宮敬次郎、安田銀行に拒絶せらる

雨宮敬次郎、一日三千圓の手形を製し、安田銀行に融通を求む、行員之を拒絶す、雨敬大に怒り行員を嘲罵す、其聲遠近に轟く、安田善次郎一室に在り、雨敬を引見し從容として曰く、『行員の之を拒絶したるは行規に違ふを以てなり、是れ大に嘉すべし、併し幸に予に私財の足下に融通すべきものあり之を與へん』と、直ちに十萬圓の手形を渡す、傍若無人の雨敬も暫し呆然として爲す所を知らず、遂に叩頭百拜して歸る、爾來安田を見ること殆んと神の如し。

○濱政弘、車夫の資格なし

濱政弘、初めて岩崎彌太郎を訪ふや、破袴短褐見るかげもなき

一寒書生なり、卒然請ふて曰く『どうか岩崎さん僕を使ふて呉れませんか』、彌太郎其容貌を熟視して曰く、『一體貴樣何國の者か』、答へて曰く『日本人よ』、彌太郎曰く、『何か出來るか』、曰く『何んにも出來ない』、曰く『腕車位ゐ挽けるだらう』曰く『挽けるだらうよ』、『好しそれでは明日から我家へ來て車を挽け』と、政弘唯々として其命に服す、居ること幾何もなくして、彌太郎、政弘に向つて曰く、『貴樣は駄目だ、腕車を挽く資格はない、今から此手紙を郵船會社へ持つて行け』と、一通の封書を託す、乃ち郵船會社へ至り書狀を受付へ出し、待つこと暫時、洋裝蓄髯の紳士出で來つて曰く、『どうぞこちらへ』と、待遇頗

る慇懃なり、此時政弘印半纏を着たる純然たる車夫體たり、頗る怪み何用なるかを問へば、紳士一の辭令を政弘に渡し、何分宜しうお願ひ申すといふ、辭令に曰く社員に任じ月俸五十圓。

○矢野次郎、老朽官吏を罵倒す

矢野次郎、曾て都門の黄塵を避けて、某地に浩然の氣を養ふ、禿頭白髯の官吏亦隣室に在り、四邊に人なきが如く事々しく自慢話に耽る、次郎窃かに其愚を笑ひ、且つ之を罵る、下婢ありて狼狽して曰く、『あなた何を仰ッしやる、彼は元老某々さん達ですよ』と、次郎首肯して曰く、『左もあらん、道理で平々凡々些の偉なく、奇なく、其老朽を自白せり、嗚呼無代價で保養が出

來た、寄席より餘ッ程面白かつた』と、乃ち隣室寂然聲を潜む。

○丸山作樂、位牌を毀ちて風呂を沸す

丸山作樂、壯にして國書を修め頗る造詣する所あり、慨然として曰く、『神州の民異域の佛教を奉ず、是れ神州の民たらず』と、乃ち祖先以來の位牌を取り、悉く之を打毀ちて薪に充て、風呂を沸して自ら沐浴す。人之を丸山の「位牌風呂」と稱す。

○神田孝平、脫刀令を動かす

明治の初年、衆議院の席上、議員福羽美靜の口を藉りて、脫刀令の建議案出づ、時の議長大原重德、頗る守舊黨にして、大に之れに反對し即決せんとす、神田孝平、副議長にして歐風主義

たり、孝平勃然として立ち、大聲疾呼して曰く、咄國家の進歩を誤る大馬鹿者、其チョン髷を取つて仕舞へと、憤々席を蹶つて退く、於是一時反對派の勢力強かりし脱刀令は、忽ち變じて悉く之を賛成するに至る。

◎野津道貫、粥を啜つて學校に通ふ

野津道貫、幼にして其家貧、日々粥を啜つて飢を凌ぐ、友人來りて道貫を學校に誘ふ、道貫曰く、『且く俟て、今粥を食つて行くから』と、母之を聞き叱して曰く、『何ぞ飯を食ふと言はざる』と、翌日例の如く友人來りて道貫を誘ふ、道貫曰く、『俟て、今粥の飯を食つて行くから』と、母傍に在り之を聞て苦笑す。

◎栗本鋤雲、アイヌの言に服す

文久二年十二月、栗本鋤雲、北門の防備忽せにすべからざるを知り、孤劍短屐、函館を發してタライカ湖に至る、積雪の高さ屋上に達し寒氣凛烈言語に絶す、鋤雲狗車の上に在り、馭者アイヌに言つて曰く『四肢將に龜裂せんとす、如何にして、暖を取るべき』と、アイヌ笑ふて曰く『此寒に堪ゆる能はずんば、安んぞ前程を蹈査するを得ん、如かず是れより歸途に就かんには』と、鋤雲又寒を說かず、竟に露境に達す。

◎中江兆民、陰甕を以て酒杯に代ふ

中江兆民、數輩と其樓に酌む、酒酣なるに及んで、諧謔百出滿

樓沸くが如し、兆民起つて双手己の陰囊を擴げ之を杯狀とし、盛るに温酒を以てし、妓を呼んで之を飲ましむ、妓も亦さるもの恭しく之を飲み干し、謹んで返杯せんといひつゝ、樓婢を招いで熱燗を取寄せ、之を囊杯に盛る、居士熱さに堪へず、大聲喚叫して曰く、『ア、酷い事をする女だ』

○大隈伯、老いて益々盛んなり

大隈伯、七十の老軀を以て各所に演說を試む、然も元氣旺盛、手を振り頭を動かし、雄辯四壁を震動せしむるのみならず、伯は常に云ふ、今の若い者は兎角惰弱に流れて困る、星だの、菫だの、コスメチックだの、ハイカラだのと軟化的思想をのみ培

養するから、到底物の用に足るべき人物の出來やう筈はなしと氣焔萬丈殆んと當るべからざる勢ひあり。

○福澤諭吉、鐵砲に代ふるに洋書を以てす

福澤諭吉、將に歐洲に赴かんとするや、一大藩侯之を聞き、諭吉に數千金を託して鐵砲の注文をなす、諭吉以爲く鐵砲は一時の用に供するのみ、如かず洋書を購ひ世益を謀らんにはと、乃ち書冊を滿載して歸る、一藩之を聞て且驚き且つ怒る諭吉自ら其書を飜譯して、之を生徒に授く、後海内の形勢一變するに及んで、始めて其先見を賞するに至る。

○井上馨、壯士を欺く

井上馨、長崎に在り、一日街上を徘徊す、誤つて垢衣弊袴長身健骨たる一壯士の刀に觸る、壯士大に怒り遂に決鬪を挑む、馨謝すれども肯かず、已を得ず其所に於て搭鬪せんことを約し、相携へて行く、馨途中窃かに一計を案じ、壯士に語りて曰く、『余等の生命旦夕に迫る、希くは一酒樓に登り永訣の杯を傾けん』と、壯士『よろしい』即ち一力樓に上る、酒出づ池の如く、妓來る花の如し、壯士恍惚として仙境に遊ぶに似たり、興到り、歡極り、百事皆忘る、馨間に乘じて樓下に出で、『勘定はあの御客から』と謂ひ了りて、飛ぶが如くに逃げ去る。

○岩崎彌之助、六錢を纏頭とす

岩崎彌之助、曾て友人と新橋花月樓に會食す、女中待遇頗る冷淡たり、彌之助甚だ快からず勘定二圓九十四錢に對し、一圓札三枚を投げ出し『釣錢は貴樣等の纏頭だぞ』女中後に至り岩崎なるを聞き『まア惜しかつたね』。

○古河市兵衛、元金二百兩に對し毎年利子二百兩を拂ふ

古河市兵衛、曾て井善の中小僧たり、當時近傍に大福餅を鬻ぐ露店の媼あり、常に市兵衛を愛す、四方山の話の末媼、金二百兩を市兵衛に貸與す、市兵衛大に其義に感じ、爾來奮鬪遂に成業の後、媼を呼んで深く其恩惠を謝し、且媼に約して曰く、『恩

金二百兩は、願くは予をして永く利用せしめよ、其利子として毎年二百兩を贈らん』と、即ち之を以て媼の養老金に充つ。

○古河市兵衛、用語極めて鄭重

古河市兵衛、事務頗る繁忙の中に在り、各所よりの來書、一々自身筆を執つて回答の勞に當る、曾て代筆せしめたることを見ず、然も其用語極めて鄭重にして、殆んど主從の判別に苦む、例之ば部下に對し、「尊公」、「被仰下」、「千萬無量難有仕合奉存候」の類。

○川端玉章、幸野楳嶺をやり込む

圓山派の泰斗川端玉章、幸野楳嶺と來章の門に弟子となり、

互ひに畏友として交り深し、然るに楳嶺曾て來章を見限り、玉章を出し抜いて鹽川文麟の弟子となる。玉章一夜酒氣を帶び、楳嶺の寢床へ躍り込み、『お前と私の中でナゼ一應の斷りもなく師匠に叛いたのだ』と一喝す、楳嶺慚然頭を搔きつゝ、其友誼の深きと、師匠思ひの厚きに感じて一言を發せず。

○橋本雅邦、妻君より覗かる

狩野派の巨擘橋本雅邦、性質溫良恭謙にして、頗る寡言なり、雅邦一度び紙に對するや、半日でも一日でも一室に立籠り、ウンともスンとも言はず、一心不亂に筆を染む、多年附添ふ妻女尙且つ之を怪しみ、若しや息でも絶えしにはあらざるかと心配

し、そッと襖の間より覗き込むこと一年何回なるを知らず。

○橋本雅邦、岩崎に負けず

橋本雅邦、岩崎家に隣す、雅邦還暦の祝をなすに當り、恰も同時に岩崎の祖母美和子刀自八十八の祝ひあり、廣く餅を配布せんとするを聞き、雅邦『如何に岩崎だとて餅位ゐに負けるものか』と、大に張込み、岩崎の餅より倍大の餅を搗き、親戚故舊に配布す。

○村井吉兵衛、夢に依て煙草の名稱を附す

村井吉兵衛、煙草業を以て名あり、一夜日輪將に東天に冲らんとして、地上の群類を照し、其壯觀云はん方なき狀況を夢み、

目覺めて尙恍惚たり、蓋し是れ我大業を成すの吉祥ならんと、即ち新製卷煙草にサンライス（昇る旭）の銘を附す、偶然にも市場の喝采を博すること恰も旭の昇るが如し。

○石川舜臺、ホッと息つく

怪僧と呼ばれたる石川舜臺、憲政黨內閣の砌、身本願寺に在りながら、東京に出でゝ政府攻擊の檄文を振りまき、如何にも不穩の擧動ありしを以て、舜臺の處分方を本願寺法主に傳ふ、『宗制に照らし罰すべき廉なし』との上申書來る、內務大臣クワッとして怒り、最後の處分に出でんとす、此時憲政內閣果然として仆る、舜臺既に京都に在り、此事を聞きホッと息をつくと同

時にペロリと紅き舌を出す。

◎井の角。倫敦紳士を驚かす

井上角五郎、歐洲に遊び英京倫敦に到り、英國知名の縉紳を招待して饗應をなす、兼て携帶したる友禪縮緬の婦人服を十數の女給仕に着せ以て宴に侍らしむ、香風紅を卷いて吉野龍田の佐保姫を舞はし、落花滿堂、意匠の奇拔に絶驚せざるものなく、就中給仕皆嬉々として愛嬌を蟹の甲良にこぼす。

◎加島屋淺子、僧侶を凹ます

大阪豪商鴻ノ池などゝ相並んで、五軒屋と稱せられたる加島屋の分家加島銀行頭取廣岡信五郎夫人淺子、夙に男優りの評あり

曾て東本願寺法主代理として二名の僧侶、加島銀行に頭取を訪ふ、信五郎不在、夫人淺子出でゝ應接をなす、用談了り將に歸らんとするや、淺子彼等を止めて曰く、『今日の世は往昔田舍の爺や婆さん連を瞞した布敎法ではイケませんぞ……』と、坊主這々の體にて逃げ去る。

◎朝田又七、徒步鐵道を踏査す

奮鬪成功者横濱鐵道會社長朝田又七、神奈川八王寺間の測量成り、之れが踏査を請はんが爲め、役員等車を備へて社長を迎ふ、社長斷乎として之を斥けて曰く、『鐵道の實地踏査は車上より爲し得べきものでない』と、七十の老軀、草鞋脚袴を穿ち壯者と

共にテク〳〵線路を往復す。

○西村勝三、義理を堅ふす

櫻組創立者西村勝三、明治の初年兵部大輔大村益次郎の勸誘に基き、衆難を排して靴商となる、浮沈盛衰常なく、其間澁澤榮一の恩顧に接すること一再ならず、常に之を感謝す、明治二十七八年日清戰役に於て巨額の利益を占む、明治三十一年に至り初めて合資會社を組織するに當り、御恩報じとして自己の持株一萬圓を割て之を澁澤へ贈呈し、出資者の一人になつて頂きたいと申込む、澁澤深く其厚意に感じ、敢て之を受取らざるのみか、更に自分の懷より一萬圓を出資し、之が株主となりて萬事

の世話を燒く。

○馬越恭平、ビールの廣告者となる

馬越恭平、惠比壽麥酒の功績者たり、惠比壽麥酒の未だ振はざる時に際し、自ら通常一顧客に扮して毎夕都下各料理店に出入し、惠比壽麥酒を侑めんことを以てす、樓婢若し他の麥酒を侑むるあれば、告ぐるに惠比壽麥酒の香味日本第一又比すべきなきを以てし、一杯一杯又一杯口を極めて其芳醇を賞し、舌鼓一番尙措かず、曰く『斯の如き麥酒を呑みて始めて文明の紳士、斯の如き麥酒を貯へて始めて文明の料理屋と稱すべし』と到る處大に惠比壽麥酒の廣告をなす。

○磯部彌一郎、米國人に耻を搔く

國民英學會主幹磯部彌一郎、米國に在り、犢鼻褌を購はんとして或商店に至り、言辭を飾る積りにて下袴を出せといふ、乃ちズボン下を出し、これではない肌へ着ける者だといふ、今度は海水襯衣を出す、『エ、解らぬ奴だ、犢鼻褌の事だ哩』と怒鳴る店員目を剝出して曰く『そんなものは文明國には無い……さつさとお還りサランバン』

○市村博士、學習院の生徒となる

博士市村鑽次郎夙に勉强家を以て同僚間に鳴る、曾て佛語に通ぜず、偶ま學習院教授となるや、同院に佛語科あるを喜び、

授業の閑を偸んで生徒間に雜り、一意專心之を學ぶこと三年一日の如し。

○馬場辰猪、饅頭を喰つて佳人を聘す

馬場辰猪、明治年代の大辯士として人に知られ、自らも日本のデモステニスを以て任ず、辰猪當時の志士中に在りて獨り酒を飲まず、而も屢々妓樓に登り、饅頭を喰つて佳人を聘す。

○大石正巳、禪機に通ず

大石正巳、曾て圓城寺天山の會葬に列す、祭文朗讀若くは演說等に時間を費し、聞く者倦憊の色あり、頓て正巳進歩黨總代として柩前に向ふ、會葬者皆又しても長演說を聞かされるのかと

擲璧す、正巳懷中より一篇の祭文を出し、うや〳〵しく柩前に捧げて去る、或人低語して曰く『ア、大石も少し出來て來た哩』

○福島安正屋根に眠る

福島安正、少時信州より飛出し、飯田町邊に下宿す、學資乏しく夜具も蒲團も皆賣飛ばして書物に代ふ、夜間眠るに蒲團なきを以て、多くは夜を徹して讀書し、晝間屋根に出でゝ日暖ぽッこをやりながら眠るを常とす、隣家江藤新平の妾宅に接す、一日江藤の認むる所となり、福島を呼入れ遂に學資を貢ぐ。

○岩崎彌太郎、夜鷹蕎麥の喰逃げをなす

大倉喜八郎、往昔窮迫の餘り大道にて夜鷹蕎麥を賣る、當時一

人の書生あり蕎麥を食すること殆んど十杯、而も一錢を拂はず遂に喰逃げをなす、當時の喜八郎に取りては恰も致命傷たりしなり、後年岩崎彌太郎に會し、語るに此事を以てす、彌太郎首を傾け默聽すること稍々久ふして曰く『其喰逃げの當人は僕であつた』と乃ち喜八郎、彌太郎の顏を熟視して曰く『さう云へば成程能く似て居るやうだ』

○岩崎彌太郎、算術を獄中に學ぶ

維新の際、彌太郎の父、事を以て郡司の譴責を受け、謹慎を命ぜらる、彌太郎憤怒密かに郡司の惡口を郡衙の壁上に大書す、郡司其彌太郎の所爲たるを知り、捕へて之を獄に投ず、偶ま商

人某亦事を以て獄中に在り、彌太郎と室を同ふす、彌太郎乃ち其商人に就き初めて算術を學び、大に通達することを得たり。

○大江卓、馬丁に馬鹿にせらる

大江卓、後藤象次郎の食客たり、常に馬丁と親み自汝の交をなす、偶ま神奈川縣令の缺員あるや、象次郎、卓を以て其後任に擬す、卓大に喜び之を馬丁に告ぐ、馬丁之を信ぜず、君にして能く縣令たらば、僕等は大臣たるべしと冷評して止まず、翌日卓傲然象次郎と轡を駢べて退廳するを見て、馬丁始めて其眞なるを知り拜伏す、卓顧眄揚々一生の快事となす。

○井上圓了、哲次郎博士を弟となす

井上圓了曰く、哲次郎博士は余と同姓で、而も次郎なる故、余の弟であるかと問ふ者多し、其度毎にマアそんなものかねーと答へければ、皆善い弟さんを持たれて結構だと羨む。

○山本權兵衛、算術の新語を製す

山本權兵衛、少時海軍兵學寮に入學す、亂暴狼藉曾て學事を勉めず、而も海軍士官の習錬を要すべき數學に至ては、尤も嫌忌する所にして加減乘除すら尚且つ滿足に會得する能はず、當時生徒間に『權兵衛算術』の新流行語を生ず、即ち無茶苦茶なる算術解式の總稱。

○井上達也、伯林に日本語の演說をなす

井上達也、伯林に在り萬國醫學大會に臨み、日本醫學界を代表して演壇に登る、獨語未だ充分ならず、言はんと欲して舌忽ち澁る、於是、知らず識らず日本語に變じ、遂に全く日本語を以て演說し了る、會員皆相見て茫然たり。

○島田三郎、六歲にして始めて言ふ

島田三郎、生れて五歲に至るも言はず、父母以て聾啞となし、大に之を憂ひ神佛に祈る、乃ち六歲にして始めて言ふことを得たり、父母大に喜び日夜種々の事を言はしめ、遂に今日の雄辯家たらしむ。

○島田三郎、始めて嚏鼻褌を占む

島田三郎、平素嚏鼻褌を用ひしことなし、曾て越後の有志者三郎を訪ふて演說會に臨まんことを乞ふ、三郎之を諾し且つ思へらく、越後は大同改進兩派の血戰地たり、屍を原野に曝らし醜體を遺すに忍びずと、乃ち出發に際し、始めて嚏鼻褌を占む。

○福地源一郎、琵琶を以て人を去らしむ

福地源一郎、琵琶を好む、而も最も拙劣人をして聽くに堪えざらしむ、客あり長坐對談の煩ある毎に、源一郎自ら琵琶を取りドレ一曲彈じましやうかと曰ふ、客皆顰蹙して去らざるはなし

○馬場辰猪、艶舞を能くす

馬場辰猪、曾て新橋日吉町に嬌居す、毎夜密に艶舞の稽古をな

し稍や上達す、或日母あり机上の扇子を見て其何の爲めなるを問ふ、辰猪包むに包みきれず、告ぐるに其實を以てし、且つ其證據を高覽に供すべしとて春雨一曲を舞ふ、母見て苦笑呆然たるもの久矣。

◎犬養毅プランデーを以て學者とす

犬養毅演說を能くす、而も豫め腹案あるにあらず、故に往々半途にして窮することあり、趣ち泰西學者の語に託し滔々敷衍、若し學者の名を得ざるときは、容易に之を製造し、某國過激黨の學者プランデー氏曰くをやらかす、聽く者皆眞とせざるはなし。

◎中江兆民、天水桶に浴す

中江篤介、夏時新宿を過ぐ、炎熱蒸すが如く殆んど步行に難む、篤介一妓樓の傍に天水桶のあるを見て、之に飛込み一時の暑を凌ぐ、觀るもの圍繞發狂者となす、偶ま警官あり、諭すに大道醜體をなすは罪法律に該當すべきを以てす、篤介笑ふて曰く、『法律は裸體の醜體を意味す、僕は敢て其罪に該らず、』と起て天水桶を出づれば、單衣の儘なるを以て警官又言ふ所なく、只啞然たるのみ。

◎朝比奈知泉、待合を以て編輯局となす

知泉頗る無性者にして自信强し、日々新聞社に在るの時、社主

伊東男と屢々衝突するも一向に頓着せず、常に待合にもぐり込み、美妓を左右に侍せしめ、小机に向つて一氣呵成文を草し、之を新聞社の小使に託し、其餘は概ね由良さんを氣取るのみ。

○朝比奈知泉の文章は娼妓の起誓文に等し

朝比奈知泉、遼東還附の當時、御用記者として筆を極めて事情の已むを得ざるを辯し、且つ大氣焔を吐く、後歐洲に漫遊の途次、友人に告るに還附の尙早きに失するを以てす、友人即ち其前説に矛盾するを詰る、知泉曰く御用記者は御用記者、宛も娼妓に於ける起誓文に等し、併し今日の朝比奈知泉は今日の朝比

○高島嘉右衞門、根本翁の爲めに頭を搔く

易學の泰斗根本通明、斯文學會境内に居を占め、時々易學の講義をなす、高島嘉右衞門亦其席に列す、翁常に聽衆と談話するに、何人を撰ばず貴樣々々と呼ぶ、嘉右衞門閉口徐に翁に向つて曰く『先生何うぞ公衆の面前で貴樣呼はりは御免を蒙りたい』と、翁曰く『よしそれでは貴樣だけはさういふを止めてやらう』と、嘉右衞門頭を抱へて退く。

○伊藤博文新聞記事を岡燒となす

伊藤博文、新聞三面種の供給者を以て名あり、或人博文に向ひ『どうです、年甲斐もない、ちと御謹慎遊ばしては』と言へば

博文疎髯を撫して曰く『乃公が草履摑みから斯く位人臣を極めたもんぢやから、世人は其境涯を羨んで、岡燒半分に彼是惡口をいふのぢや、うつちやつて置け』

○白根專一家を有せず

白根專一、資性廉剛、極めて潔白にして蓄財の志なし、其正を守りて毫も枉げざるの氣質は、確に之を乃ち父多助に稟く、專一遞相を罷むるの後尚一家を有せず、家賃十二圓を拂ふて店借す。

○桂太郎、麥酒と煙草を獨逸人に學ぶ

桂太郎、曾て獨逸に留學し、兵學を修む、教師太郎に教ふるに、

兵學を爲さんとすれば第一佛語、第二兵書、第三煙草及麥酒なりとて、毎日晩餐の時麥酒を飲ませ、煙草の味すら知らざる太郎に、先づ卓上の埃及卷一本づゝを取りすゝめ、次第に葉卷を吹かすことを教へしが、昨今に至りては煙草第一、麥酒第二、佛語や兵書は何處へやら……とは太郎常に人に向つて自白する所。

○曾禰荒助、光妙寺三郎を三階より突落す

曾禰荒助、壯時佛國に留學す、光妙寺三郎亦在り、一日某街三階樓上日本人懇親會を開く、席上三郎極端なる民權自由說を主張し、日本の國體に論及し、氣焰當るべからず、聞くもの皆憤

慨せざるなきも、三郎の才辯に及ぶものなし、曾禰乃ち突然起上りて三郎を引捕へ、三階樓の窓外に突落す、三郎意氣消沈し爾來曾禰の前に氣焔を吐くことなし。

○志賀重昂、詐欺に逢ふ

志賀重昂、嘗て靜岡より東海道線の汽車に搭ず、車中一紳士あり、風貌高雅、識見該博自ら宮城病院副院長柏村貞一なりと云ふ、車中懇親を結び、種々旅情を慰す、後貞一志賀を訪ひ、前日の交誼を謝し且つ曰く『京阪よりの歸途掏兒の爲めに手鞄を掏取られ、一錢を餘さず、甚だ當惑せるを以て二十金を貸與せよ』と、志賀之を氣の毒に思ひ、其乞ひに應じて之を貸與す

後沓然絶えて消息なし、是れ病院長の名を騙りて志賀を一杯喰はせし者。

○陸奥宗光、伊藤公を以て大愚物となす

陸奥宗光、屢々伊藤を罵つて天下の大愚物と爲す、人あり『何故に足下は其愚物に隨伴するや』と問ふ宗光曰く『世の中の事は一概に言ふべきものに非ず』と澄し込む。

○井上馨曾て綿入を着けず

井上馨、冷水浴者を以て名あり、既に年七十餘歲、嚴冬尙且つシャツを着けず、僅かに襦袢、袷及袷羽織を着けるのみ、談偶ま體育に及べば、即ち袖を捲くり見掛けによ

らぬ巨腕を出し、『どうだ金鐵も倚及ばないぞ』

○福田行誠師、盜賊を追拂ふ

福田行誠師、傳通院に住職たり、一夜賊來つて其室に入る、師恰も念佛三昧に耽る、賊刀を擬して金を出せと迫る、師徐ろに火鉢の引出しを指しつゝ、南無阿彌陀佛、々々々々々々を唱へて止まず、其聲透徹壯嚴を極む、賊終に恐を抱き一物を得る能はずして去る。

○福田行誠師吉原に遊ぶ

福田行誠師、一日吉原某樓に遊び、亭主を呼んで曰く『私は之から大に遊ばうと思ひますから、どうぞ此樓の女郎衆を殘らず

呼んで下さらんか』と亭主唯々として去る、間もなく大妓小妓ズラリ師を取圍む、師大に喜んで曰く『私も一度吉原へ來て見たいと思つて居ましたが、其思ひが屆いて斯んな嬉しいことはない、就ては一つ言つて置きたいことがあるが、お前達は放蕩者を相手だから取れるだけは取つてやるが善い、又欺されるだけは欺してやるが善い、けれどもお念佛だけは常に唱へしやつしやれや』と座上の妓皆隨喜の涙に咽び賽錢山をなす、師曰く『色町に來て女に惚れられ金を持て歸る色男は私一人であらう』

○田尻稻次郎、交番燒打事件の發頭人と間違へらる

交番燒打の當時、萬世橋上弊衣、弊帽、大なるステッキを脇挾

み、鬚髯蓬々として頭髪延び、人相尤も物騒なる人物の濶歩するあり、巡査即ち交番燒打の發頭人ならんと推し、忽ち之を誰何す、曰く『汝何者ぞ、』曰く、『官吏！』、『何處の官廳ぞ』、曰く『會計檢査院』『受付か』彼冷々然として曰く『院長』巡査そこ〳〵にして逃ぐ。

◎高田早苗の書東學堂を困らす

早稻田大學長高田早苗、甚だ書に拙く、讀むものをして殆んど惱殺せしむ、嘗て一書を裁して尾崎學堂に寄す、數日を經て尚返書に接せず、早苗大に怪み走せて學堂を訪ひ之を詰る、學堂曰く『君の手紙は如何に讀まんとするも讀むこと能はずそれが

爲めに、あたら時間を費せり、讀めぬ手紙の返事は出すこと能はず』と、早苗頭を搔いて曰く『仕方がない、以來は手紙に代ふるに電話にしやう』

◎奥田義人の睾丸演說

奥田義人、嘗て法科大學に在るの時、癪にさはる事あり、同級生一同ストライキを謀る、軟派生あり躊躇逡巡す、義人憤慨に堪えず、衆を排しつゝ高きテーブルの上に登り、前をまくり睾丸を出して曰く『諸君之れがあるか』と、衆意乃ち決す。

◎湯地機關總監、伊東元帥の睾丸を握る

日清戰役の當時、伊東元帥松島艦に在り、炎暑蒸すが如し、乃

ち元帥窃に裸體となり汗を拭ふ、人あり背後より元帥の睾丸を握る、元帥驚きて之を顧みれば、勇氣凛々たる湯地機關總監なり、元帥之を咎む、總監曰く『戰正に始まらんとす、閣下の睾丸若し上り居らざるかを檢せしなり』と、元帥呵々笑つて曰く『大丈夫だ見ろ〳〵此通りだ』と、於是乎總監艦中を觸廻りて曰く、『司令長官の睾丸が下つてる大丈夫戰爭は勝ちだ』と、之を祝しつゝ全員と共に大盃を擧ぐ、爲めに全艦益々勇氣加はる

◎栗原亮一、新聞を蒲團に代ふ

栗原亮一、少時頗る窮困、而も能く苦學す、如何なる嚴冬と雖も湯も呑めず、火にも近寄ること能はず、垢染みたる袷一枚、

如何に勇氣を鼓舞するも殆んど堪ゆる能はざることあり、亮一古新聞を揉んで之を背中に突込み寒を防ぐ、又一枚の蒲團あるにあらず、故に例の揉みたる古新聞を押入に敷き、其中にもぐり込みて寢ぬ、其狀恰も鼠の如し。

◎清浦奎吾、芋を盜む

清浦奎吾、曾て京都西本願寺の學寮に在り苦學す、一夜苦學生同士にて京の在所に芋を盜む、畑主の認むる所となり、遂に捕はれてさん〳〵に打擲せらる、一同平あやまりに謝罪して漸く事なきを得たり。

◎天下の糸平醉客の爲めに大儲けをなす

田中平八山谷の有明樓に飲む、醉客隣室に在り其豪遊を嫉み、罵つて曰く糸平を二階より下げろ〳〵と、平八之を聞き俄かに喜色滿面、宴を樓下に移し大に飲む、翌日定期米に依つて大儲けをなす。蓋し醉客の下げろ〳〵を辻占となせるもの。

名流百話をはり

不許複製

明治四十二年二月一日印刷
明治四十二年二月十三日發行

編者　渡邊斬鬼
發行者　東京市神田區小川町四十一番地　井上藤吉
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　山田英二
發行所　東京市神田區小川町四十一番地　文錦堂

博文館印刷所印刷

定價金拾七錢

12

94
609

94
609

005134−000−8

94−609

名流百話

渡辺　斬鬼／編

M42

ACE−1970